
セクター

夜雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セレクター

【Nコード】

N7367U

【作者名】

夜雪

【あらすじ】

この国には生存権付与制度というものが存在している。それは、無作為に選出された二人の人間のどちらかに生存権を与え、もう片方を処刑するという制度である。

「01」 始まりの言葉

灰色の空からは雨が降っていた。

冷たい地面に倒され、服がぐちゃぐちゃで、何もかもが悔しくて、それでも立ち上がれなくて……。

目の前に立つ男の影が、視界を更に暗くした。

「久しいな」

もう一度戦おうと、傍らに落ちている傘へと手を伸ばす。

だがすぐに足で踏まれ、それを拒まれた。男の長い前髪から覗く冷たい目がこちらを見下ろす。

「こんな所で家族ごっこをしているとは……。私のことをもう忘れてたわけではあるまい？」

忘れるはずがない。

時宮源太^{じくげんた}。親の仇で、殺さなければならない相手。

時宮の前髪から雫が落ちる。顔の上に落ちてくるのが屈辱だが、どうすることもできない。

「一つ問おう。あの時お前は大切なものを守れなかった。それが何故だか分かるか？」

問いには答えず、憎しみを込めて睨む。

すると時宮は不敵な笑みを浮かべた。

「わからないのならば教えてやる」

時宮の羽織っている季節外れの黒いロングコート。その内側に付いているバッジを、こちらに見せ付けるように指で弾いてみせた。

「お前には力がないからだ」

その紋は誰もが知っている。国で最も権力があると言われているセクターである証。

齒がゆい。どうしてこんな奴が権力を持っているのだ。

「お前はとうしようもないほどに小さく、そして弱い」

何も言い返すことができない。時宮は強く、大きかった。それは

体のことだけではなく、存在そのものが想像も付かないほどに大きいのだ。目の前に立ちはだかり、どう足掻こうがびくともしない。ずっと眼前で影を落とし続ける。

憎い。今すぐに殺したい。

「もしこれから先、大切なものを失いたくないというのなら私に付いて来い」

時宮はそれだけ言うと、こちらに背を向けて歩き始めた。

逆らえない。その言葉には脅迫染みたものを感じた。この男は今の家族をも奪おうとしているのだ。

止むを得なく立ち上がる。傘を拾い、背中 of 紋章を睨み……そして、再び時宮へと襲い掛かったのだった

セクターになって一年。今日が最も目覚めが悪いと断言できる原因は八年前の夢を見たこと。穏やかな日常を取り戻し始めていたのに、全ては奴のせいで崩れ去ってしまった。

こんなにも気分は暗いのに、外に広がる冬空は晴れ渡っていた。同じ悲しみを持つ人間がこの空の下に何人いるのだろう。みな担当したセクターを知らず、敵討ちができずに悔しい思いをしているに違いない。

でも俺は違う。復讐すべき相手が分かっているのだ。だからこそそういう人たちの為にも果たさねばならない。

だがこれはあくまでも個人的な決着であって、それが全ての解決になるわけではない。結局奴が消えたところで、同じ悲しみを持つ人間は増加していくのだ。それは、この国にとある制度が存在しているからである。

生存権付与制度　通称、セレクション制度。

増えすぎた人口への対策として、一月に一度、セレクションと呼ばれるものが行われる。

セレクションはこの国に住む全ての十五歳以上が対象で、その中から無作為に選出された二人の人間が協会へと召集される。そして二人の内のどちらかをセレクターが選ぶ、という流れで行われる。選ばれなかった人間を選死者、選ばれた人間を選生者せんきしゃというのだが、この二人の人間は対極の道を辿ることとなる。たったこれだけのことで、選死者はこの世から抹消、つまり処刑されてしまうのだ。その反面、選生者には生存権が付与される。罪を犯したり、下手なことをしない限りは、永続的にセレクションの対象になることはなくなる。

俺の母は、時宮の手によって選死者となってしまった。きっと母の人生は幸せとは言えないものだっただろう。毎日と言ってもいいほど父に蹴られ、殴られていた。しかもその拳句にセレクションだ。母がセレクションの対象者となった時、子供ながらに世の理不尽さを感じていた。何故誰にでも優しい母が選出されたのか、何故暴力を振るう父ではないのか、と。

そんな父も、時宮は反逆の罪で殺したと言っていた。まさかセレクションに呼ばれた母を守る為に……なんてことはあるはずはないだろうが、もし万が一そうだったとしても許せそうにはない。死しても尚、憎しみが残っているくらいだ。

でも今となつては、その憎しみも時宮にぶつけるしかない。残るは時宮だけなのだ。

自室から一步出れば、長い廊下がずっと先まで続いている。窓から差し込む光で白く輝き、その上を人々が行き交っている。

ここを通る人間のほとんどがセレクターだ。だがどいつもこいつもそんなに優秀そうには見えない。学生と大差がないのだ。愚痴や愚痴を言い合い、つまらない洒落に笑い、くだらない噂に現を抜かす。

今だって、聞く気がなくても自然と耳に入ってくる一つの噂がある。

セレクターには階級があり、DからSクラスまでに分類されてい

る。Sクラスは最も優秀で、他のセレクターからも一目置かれる存在である。

だが今回の噂。その更にも、SSクラスが存在しているというのだ。協会の全てを掌握しており、セレクションに呼ぶ二人の人間を独断で決めているという。

くだらないと思う。もしそれが本当なら、母もそいつの気まぐれで選ばれたとも言えるのだろうか。

「あのっ！」

ぼんやりと考えていたら、すれ違いざまに声を掛けられた。

随分と若い。同年代ぐらいだろうか。

いかにも気弱そうで、温室育ちのぼんぼんという印象を受ける。

「御歳宗希さん、ですよね？」

「そうだけど」

男の表情が引き締まった。

「僕は新しくセレクターになった草加といいます！ よろしくお願
いします！」

「ああ、うん。よろしく」

新人が何故俺に挨拶をしてきたのだろうか。誰かが俺に挨拶するよ
うに仕向けたのだろうか。

向こうも黙り、こちらも考え込んでしまったので、なんだか妙な
空気になってしまった。

「合格できて良かったじゃん。君の家族は優秀な息子をもって幸せ
だろうね」

優秀というのは世辞でもなんでもない。

人の命を左右する、重要な選択をするセレクター。当然誰でも簡
単になれるものではない。過酷なセレクター試験を受け、十ヶ月に
たった一人、本当に一握りの人間にしかなることができないのだ。

だからこそ、当然セレクターになるメリットはある。セレクター
になれば、その家族はセレクションの対象から除外される。

まあ彼とは違い、家族のいない俺にとっては関係のない話なのだ

が。

「はい！ 両親も喜んでくれました！」

こんな駄目そうな奴でも、一応あの十ヶ月を乗り越えたのだ。きつと中身はすごいに違いない。

「御歳さんはすごいです！」

草加は、はしゃぐ子供のような調子で続ける。

「時宮先生の弟子というだけでなく、最年少でAクラスセクターになったとお聞きました！」

「あー……」

事実だがすごいというのは理解できない。こんなのは続けていれば誰だってなれる。それが早いか遅いかだけの違いにすぎないのだ。

「僕も早く御歳さんみたいな立派なセクターになりたいです！」

「いやあ、それはやめたほうがいいよ」

えっ、と小さく言い、口を開いた状態で固まってしまった。

「俺を目指すぐらいなら時宮先生を目指す方がいいんじゃないかな？」

「時宮先生をですか？ 無理です！ 僕は絶対あんな風にはなれません！」

その反応を聞いてむっとうとしてしまう。この一連の会話が、俺程度ならばすぐに追いつける、という意味に聞こえた。

「なんなら時宮先生に弟子入りを頼んでみたらどう？ 実力を認めてくれたら俺を捨てて優先してくれるんじゃないかな？」

草加はこちらの心の内を見透かしたのか、先程までの勢いは消え、意気消沈してしまった。

「あ、えっと……気に障ったのならすみません」

謝罪を聞き、大人気なかったか、と反省する。

「いやまあ……お互い頑張ろう」

「はい！」

はあ、とため息を一つ。

なんだか調子が狂う相手だ。できればもう二度と関わりたくはな

い。

「ほう。意気込んでいるな御歳」
神出鬼没。

後ろから低音の声が聞こえてきたと思ったら、目の前にいる草加はわかりやすく動揺した。

振り返ると、一瞬にして視界が暗闇に包まれた。

貫禄のある立ち姿。いるだけでその場の空気を重々しくする男。

「じ、時宮先生！」

素っ頓狂な声を上げた草加は、全身ががちがちに固まってしまった。最初に時宮を見た人間の大体がこんな反応をする。

今にも失神してしまいそうな草加を、時宮が鋭い目で見据えた。

「新人は雑談をしている暇があつたら部屋で本でも読んでろ」

「は、はい！ 申し訳ありません！」

草加が逃げるように走っていく。

時宮はそれを見送った後、こちらに視線を向けた。

見られただけで萎縮しそうになる。この目付きにやられたのだから。

「セレクターの仕事にも大分慣れてきたようだな」
妙だ。

「どうしたんですか？ 時宮先生が直々に会いに来られるなんて」

「今日はお前の誕生日だ。プレゼントをやらうと思つてな」

いい気持ちのしない言葉だ。一体何を企んでいるのだろうか。

「受け取れ」

時宮が懷から取り出したのは、大きめの封筒だった。次のセレクション対象者の書類が入ってるであろう、ただの封筒だ。

しかし時宮が持っているということが理解できない。普段は自ら事務室へ取りに行く物なのだ。

「はあ、ども」

不審に思いながらも受け取る。でも奴から視線は逸らさない。
プレゼント、と言うからには何かあるのだから。

事務室に行く手間を省いた、それがプレゼントということだろうか。それとも数日前に言っていた昇格試験の話だろうか。

……いや、この男に限ってそんなことは有り得ない。だがそうだとしたら一体なにを企んでいる。

「確認しないのか？」

「したほうがいいのでしょうか？」

奴は口元に不敵な笑みを浮かべた。

なるほど、この中に何かを仕込んでいるのか。そういうことならば望むところだ。

封筒の口を広げ、中に手を突っ込んでみる。だがそこには書類しか入っていないかった。

封筒の中に何かを仕掛けている、なんて幼稚なことはするはずもないか。だとしたら後確認すべきは

「っ！」

紙を取り出し驚愕した。それなりの覚悟をしていたつもりではあった。でもどうやらこの男をなめすぎていたようだ。

一番上、対象者二人の名前を見て目を疑いたくなった。だが何度確認しても確かにそう記してある。青羽小夜、あおばさよ青羽朱音、と。

「誕生日おめでとう」

「くっ！」

喉元まで出掛かった言葉が出てこない。睨むことしかできない自分に、奴に対する弱さを感じた。まだどこかでこの男のことを恐れているのだ。

「いい目だ。その目を忘れるな」

奴は冷笑を浮かべたまま目の前から去って行く。

ああ、よく思い出させてもらったよ。あんたが親の仇で、敵であるということ。

俺はあの日のように、奴の背中を睨みつけていた。

部屋に戻った時、もう外は暗くなっていた。考え事をしていて、

どこを歩き回っていたのかすら覚えがない。

封筒を置き、書類を取り出す。強く握りすぎたせいか、書類には指の痕が残っていた。

頭を冷やしたつもりだった。しかし書類を見た途端、再び熱いものが込み上げてきた。

もしもセレクションに手を回したのだとしたら、そんなことができるのは噂のSSクラスくらいだ。単なる噂じゃなく、実在しているとでも言うつもりなのだろうか。俺だって力を手に入れたのに、結局は奴に……。

……ふざけるな。奴はまた全てを奪うつもりなのか？

「くそっ！」

強く壁を殴る。その音と拳の痛みで我を取り戻した。拳の跡が残ってしまった壁に手を重ねる。

どうかしている。物に当たったところで解決にはならない。今できることを冷静に考え、実行し、最善の選択をしていく。ちゃんと先のことも考え、最悪の状況も想定し

どうするにしてもとりあえずは接触だ。奴をどうにかできないのなら今は従っておくしかない。担当をはずされたらそこで終わりののだ。

「小夜、朱音……」

再び関わることになるとは思ってもいなかった。

いや、思いたくなかった。もう関わるべきではなかったのだ。それなのにこんな形で再会をすることになるなんて。

「え？」

書類を目で追っていくうちに、一つの欄を見て動けなくなってしまった。二人の両親が死んだことになっている。何故かはわからないが、死因も書かれていない。

奴の嫌がらせか、はたまた力を試しているのか。どちらにせよ、知りたければ自力で調べろということだ。

時宮の考えを理解し、すぐさま出発の準備を始める。

俺は毎回、自分の担当するセレクションの対象者には接触するようになっている。実際に見てみないと分からないこともあるからだ。接触後は減点方式を取り、減点の少ない方をセレクションにて選択している。

一通りの準備をし、荷物の確認をする。

忘れ物はなし。後は明日の出発に備えて休むだけだ。

「留意事項」

休む前にいつもの言葉を繰り返す。

「人を信じない、心を開かない、無駄口を叩かない」

セレクターにはいくつもの厳しい誓約がある。その一つに、『資格保持者は、自らがセレクターであることを公言してはならない』というものがある。

もしこれを破れば、こちらがなんらかの罰 下手すればセレクター免許の剥奪も考えられる。セレクター免許の剥奪というのは最も重い罰で、事実上処刑である。ただ聞こえをよくする為だけに、免許の剥奪などと言っているのだった。

今回は対象者が対象者だけに特に注意が必要だ。

「無理はしない」

どんな状況だろうと相応の休息は必要。今も例外ではない。今日はずっと休むでしょう。

電気を消し、ベッドに横になって力を抜く。段々と視界が狭くなり、やがて全てが暗闇に包まれた。

『次回のセレクションはお前のSクラス昇格試験も兼ねている』

数日前の奴の言葉が蘇ってくる。

『分かっていると思うが、これに合格すれば、お前は史上最年少でSクラスに昇格することとなる』

俺が昇格することは、時宮にとつてのメリットは何一つとしてない。不合格が確定しているようなものだし、さぞ嬉しかったことだろう。

……だが思い通りになると思うな。飼犬に噛まれる飼主の気

持ちというのを必ず味あわせてやる。これに合格して、俺はあんたと同等のＳクラスになる。そう、同等だ。ＳＳクラスの存在など有り得ない。こんなセレクションはただの偶然にすぎないのだ。合格すれば同等、同等なのだ。

……駄目だ、もうやめよう。一日中同じことばかり考えていて疲れた。今日は久々にぐっすりと眠れそうだ。

あの雨の日。時宮が目の前に現れ、次の日には人里離れた小屋へと連れて行かれた。

そこから七年ほど、毎日定時にやってくる時宮との生活が始まったのだった。

「私はお前の両親を殺した。もし私が憎いのならば殺してみろ」それが時宮の口癖だった。

母がいなくなった時、軟禁生活の時、セレクター試験を受ける直前にも 時宮はことあるごとに、憎め、殺せと言ってきた。

だから言われるがままに時宮に憎しみをぶつけ続けた。当然全て失敗に終わったのだけれど、いつか必ず殺してやると、何度も何度も挑戦し続けた。

でもいつからだろう。そんなこともしなくなっていた。

もちろん憎しみが消えたわけではない。できることなら今すぐ、考えうる最大限の苦しみを与えて殺してやりたいほどだ。

思い返してみればあれは半分諦めだったのだろう。しかしあとの半分は、時宮の言う通りにするのが馬鹿らしいと考えるようになっていたからだ。

言いなりにはならずもつと違う形で。例えば奴以上の権力を以てして、完膚なきまでに叩きのめし、協会にいられなくするのだ。

我ながら完璧な妄想。そう、結局は妄想だ。

奴は思っている以上に大物だった。セレクター同士の繋がりなど

ほぼ一部に限られているのに、協会に奴のことを知らない人間が一人としていないのだ。

あの日も感じた通り、やはり奴の大きさは計り知れない。けれどもいつかは必ず果たしてみせる。奴を負かし、跪かせ、謎も解明するのだ。無口な時宮が意味もなく言葉を口にするはずがない。真意が必ずあるはずなのだ

「02」 選択と再会

次の日の朝には列車に乗っていた。

鞆の中には、権力の証であるコートとバッジも入っている。自分の立場を忘れない為にも持ち歩くべきだと判断した。

しかしどうも落ち着かない。

鞆を開けて中身を確認する。今度は腕時計を見て、カチカチと爪で叩いてみた。

焦っては駄目だ。それもわかつている。けれどこんなところでいつまでも立ち止まっているわけにはいかない。何せ時間は限られているのだ。たった一ヶ月。後悔しない選択をする為、一秒たりとも無駄にするわけにはいかない。

早く着かないものだろうか。もう列車に乗って大分経つが、こんなに遠かっただろうか。

様々なことが頭をめぐり、最後にふと朝の出来事が思い浮かんできた。そういえば今日は、協会の中も落ち着きがなかった。

朝に手渡された一枚の写真を取り出す。男が緊張した面持ちでこちらを見ているその写真を見ながら思う。ご愁傷様だ、と。

セレクションを前に逃げ出す人間は少なくはない。それをエスケープと呼んでいるのだけれど、残念ながら即指名手配だ。捕まれば当然処刑。しかも生温いやり方ではなく、非常に残酷なやり方で。

この男は確実に捕まる。あれだけの人間が慌しく廊下を走っていたのだ。きっと協会を敵に回した恐怖をその身で味わうことになるだろう。

「まあ、関係ないか」

小休止。写真をしまい、背もたれへ体を預けた。

列車に揺られながら、薄い色の空をぼんやりと見つめる。ガラス越しに見るその青には、今にも過去の思い出が映し出されるようであった。

あの日々が続けば良かった。それはきつと、とてつもなく幸せだったのだろう

両親を失い塞ぎ込んでいた俺に、再び生きる気力を与えてくれた家族。春の太陽のように暖かく、優しい光で包み込んでくれた。

あの頃はちょうど季節が春だった。その影響なのだろう。あれから春が来る度、心躍るような感覚を覚えていた。暖かな太陽に青羽家の日々を見て、いつかを思い出していたのだ。

列車が走り続けるに連れ、車窓の外に広がる風景が殺風景になってきた。冬枯れのせい、見るからに冷え冷えとしている。でもじきに花も咲き始めることだろう。このセレクションが終わった頃には、初咲きの花が見られるかもしれない。

気を引き締めよう。これから春を好きでい続ける為にも。

列車が緩やかに停車する。この次に停車した時、その時はもう目的地だ。

息苦しさを感じて胸に手を当ててみる。

らしくない。少しばかり緊張しているみたいだ。

「隣、いいかい？」

停車している最中、突如声を掛けられた。

先程まで他の客は見えなかったのだけれど、いつの間にか通路に男が立っていた。野球帽を深く被り、サングラスを掛けている、不精髭が印象的な中年の男だ。

少し遅れて手で合図すると、軽く会釈をして雑に座った。

この男、何処かで見たことがあるような気がする。

「ん。なにか？」

「いえ」

ついじつと顔を見てしまっていたらしい。失礼なことはわかっているのだが、気になって仕方がない。

帽子とサングラスが邪魔だ。なければ思い出せるかもしれないのに。

「旅行か何かかな？」

考えていると、男がサングラス越しにこちらを見ていた。

「ええ。まあそんなとこです」

この思い出せそうで思い出せない感じ。ここまで思い出せない、ただの気のせいだという可能性もある。

「どこに行くの？」

「鈴白まで」

それを聞いた男はにやつと笑みを浮かべた。何故だかわからないけれど、その口元を見ているだけで不快感を感じる笑みだった。

「奇遇だねえ。俺も今から帰るところなんだよー」

「帰るってことは鈴白の人なんですか？」

「そうそう。生まれてからずっと鈴白なんだ」

鈴白ほどの田舎ならば、近所の人間だったという可能性もある。生まれてから十年くらいはあの土地にいたし、その時に見かけていたのかもしれない。そうでなければ、似たような人間を見たことがあるだけなのだろう。

「あそこはいいところだよー。何もないけど、それがまた逆にいいんだ」

「そうですか。楽しみにしておきます」

男が再び口元に笑みを浮かべる。嬉しかったのだろうけれど、やはりいやらしい笑みに見えた。

会話が途切れ、再び流れる景色に目をやる。そのまましばらくすると、場内アナウンスが流れた。次にブレーキ音が聞こえ、やがて列車が完全に動きを止めた。開いたドアから外へ出る。

冷たい空気に包まれ、一瞬で体の芯まで冷え切ってしまった。でも悪くない。都会の寒さと同じはずなのに、こちらの寒さは不思議と嫌な感じはしない。

先程の男がこちらに軽く挨拶し、手を擦り合わせながら去って行った。それを見送り、さてどうしようか、と空を見上げる。

良心が咎めるなんてことはない。だがこれが良くないということ、は頭の中ではわかっている。

騙すのだ。しかも過去の知り合いを。
首を振る。

今更だ。これまでに何人もの人間を騙してきたと思っている。そう考えると、やはりセレクターは天国へはいけないと思う。これほど人々から恨みを買っている人間もそういないだろう。

プラットホームを歩き、古ぼけた駅舎を抜け、町へと一步を踏み出した。

ここを出た時と比べると、俺は随分と変わったように思う。一人で様々なことができるようになったし、自分の弱さを理解できたし、そして何より……人の死に慣れた。

自身にはそんな変化があったのに、一方でこの町は時間の経過を感じさせない。

見えてくるものが全てが懐かしかった。スーパーの看板、道路の錆び付いた標識、緑に囲まれた学校、古臭い店。そういえば駄菓子屋のおばあちゃんは元気にしてるだろうか。

昔を思い出していたら、自然と歩みが軽やかになった。こんなにも穏やかな気持ちになるのは何年振りだろう。この町を出てからは心休まる時などなかったように思う。

……駄目だ、勘違いしてはいけない。今だってこんな気持ちになっっているのは間違っているのだ。目的があってここへやってきた。別に帰ってきたわけでもないし、観光に来たわけでもないのだ。

立ち止まって鞆を開く。するとすぐにコートの紋が姿を現した。それを見てもう一度気を引き締める。俺はセレクターで、そしてこれは昇格試験。合格して時宮に追いつくのだ。

町を流れる川。その上に掛かった橋を渡り、しばらく歩き続ける。すると見慣れた二階建ての家が見えてきた。あれが今回の目的地。奴の元で長い時間を過ごし、やっと追いつく機会がやってきた。こんな好機を逃すわけにはいかない。これはきつと代償なのだ。これが最後の試練で、時宮に並ぶ為の儀式みたいなものなのだろう。ずっと考えてもわからなかったことが、自然と頭の中で答えが出

ている。小夜や朱音を捨てるのか、昇格を捨てるのかという選択。小夜や朱音は家族と言っても過言ではない。だから守りたいという気持ちはある。しかし、奴に追いつくという目標が大きすぎるのだ。

昇格は絶対にしたい。いや、しなければならぬのだ。時宮に追いつき、そしていつかは奴を越える。その暁には今までの全ての恨みを晴らすのだ。

……だとしたら小夜たちは昇格の為の道具だと割り切るしかないのだろうか。この選択は本当に最善なのだろうか。答えが出ているとはいえ、完全に迷いを拭い去ることができないでいる。

考えている内に、あつという間に辿り着いてしまった。家を見上げて目を瞑る。

おじさんごめんなさい。俺はあなたに救われたというのに、その恩を仇で返そうとしています。恐らく俺はもう、心が痛むことはないです。小夜や朱音を傷付けることになったとしても、きつと

呼び鈴を押すと、遠くの方で返事が聞こえた。

すぐにわかった。小夜の声だ、と。

家の中を歩く音が段々と近付いてくる。

今ならまだぎりぎり引き返せる。全力で走ればただの悪戯として済まされるだろう

そんな風に考えた。でもすぐに一瞬でもそう考えた自分が情けなくなつた。

馬鹿言っちゃいけない。迷いがあるとはいえ、さつき昇格を優先すると決めたばかりなのだ。引き返す必要性などない。間違はなくこれが今の最善なのだ

ノブが回された。もう一度、「はい」という返事が聞こえ、次にドアがゆっくりと開いた。

外を覗くように現れた姿。その姿を一目見て、ああやっぱりな、と思った。小夜は見事美人に育っている。昔からそんな雰囲気はあ

つたが、大人っぽくなり、更に磨きがかかった感じだ。

「小夜。久しぶり」

出てきた小夜は最初こそ笑顔だったが、すぐにぼかんとした表情に変わった。そして最後には目を見開き、ひっ、と小さく声を上げた。まるでお化けでも見たかのような反応だった。

「な、なんで。なんでそうくんがいるの」

意味がわからない、とても言いたげにおどおどし始めてしまった。その様子に頬が緩んでしまう。

「なんでって言われてもなあ……」

笑いながら返したが、内心では居心地の悪さを感じていた。理由など聞かれても答えられないのだ。

どうしたのおねえちゃん、という声が中から聞こえた。異様な空気を察してか、朱音もやってきたらしい。ドアを支えている小夜の脇から、ひよっこりと顔を出した。

こっちもこっちで想像通りだ。昔から決して美人とは言えなかったけれど、女の子らしい可愛い顔をしていた。あの頃とほとんど変わっていない。

「クーにいい!？」

朱音が小走りで飛び出してきた。

ちなみにクーにいいというのは、朱音特有の俺に対する愛称である。あれはまだ俺がここに来たばかりの時のこと。馴染めない俺は二人に冷たい反応をしてしまっていた。そんな時に小夜が朱音に向かって、「クールなおにいちちゃんだね」と言い、それに対して朱音が呟いた言葉が、「クーにいい」だった。最初は何を言っているのかわからなかったけれど、どうやらあの時に朱音の中で呼び名が決まっていたらしい。

にしても靴も履かずに飛び出してくるとは、相変わらず色気のいい字もないような子だな、と思う。

「クーにいい……」

目の前に来た朱音の目に涙が浮かぶ。俺の服の裾を掴み、そのま

ま泣き始めてしまった。

そんなことをしなくても、もう逃げる気はないというのに。

「相変わらず泣き虫なところは変わってないんだね」

「だって……だってえ……」

「はいはい中に戻って。もう十五なんだから少しは落ち着きなさい」
言ってみたものの、朱音は断固としてその場から離れることを拒絶している。どうやら落ち着く気はないらしい。

朱音のことはとりあえず置いておくとして、小夜が先程から動きを見せないのが気になる。

「小夜？ どうした？」

えっ、と戸惑った声を上げる。

なんだか様子がおかしい。そんなに俺が戻ってきたことが信じられないのだろうか。

「元気だった？」

「うん。元気、だよ」

今の変な間は、何かがあった時の反応と見て間違いない。おじさんたちのことだろうか。

目を逸らした小夜は無表情になっていた。生気が抜けたかのように、俺と朱音の間あたりを見ながらぼうつとしている。その状態でしばらくして視線を上げた。

「……とりあえず上がったら？」

「そうさせてもらうよ。でも」

と、朱音を見ながら降参のポーズを取ってみせる。

小夜は呆れ顔で少しだけ笑みを浮かべた。

「ほら朱音、そのままじゃそくんが動けないでしょ。早く入って」
すると朱音は顔を上げ、上目遣いでこちらを見た。

「……逃げない？」

「逃げない逃げない。ほら行くよ」

朱音にしっかりと掴まれたまま、久しぶりに青羽家の敷居を跨いだ。小夜に付いて行き、居間の中へと誘導される。

模様替えされているものの、なんだか懐かしい気持ちになってる。そういえばこんな香りだったかな、とあの頃が今にも蘇ってくるようであった。

懐かしさを噛み締めながらソファへ腰を下ろすと、隣に朱音が、テーブルを挟んだ向かい側に小夜が座った。

「あれ？ おばさんはいないんだね」

自然な流れで聞ける時に聞く。

さつきから隣にくつついている朱音の様子は窺えないが、目の前にいる小夜の顔はわかりやすく曇った。

さすがに書類に書かれていることが嘘なんてことはないか。

「お父さんの仕事の出張で、お母さんも一緒に付いて行ってるの」
少し考えてから小夜が答えた。視線は合わせてくれない。相変わらず嘘が下手なようだ。

嘘だとわかつていることが尚更もどかしい。俺を家族と認めてくれたはずなのに、どうしてそんな嘘をつくのかわからない。水臭くはないだろうか。

「そっか。おじさんいい仕事見つかったんだね」

「うん。あれから知り合いの人のところだね」

おじさんは俺が両親を亡くした後に入った施設で働いていた。だがある日、俺がおじさんの家へ引き取られることになり、それと同時に施設の仕事をやめてしまっていた。それからは毎日のように遊んでくれた。小夜や朱音たちが嫉妬するくらいに、俺を本当の息子のように可愛がってくれたのだった。

俺が時宮に再会するあの雨の日まで仕事をしていなかったのだが、その後に仕事が見つかったという話は事実なのだろう。嘘が苦手な小夜の口からさりと言葉が出てきたのがその証拠だ。

「それよりいきなりどうしたの？ 今まで連絡一つくれなかったくせに」

口調は穏やかだけれど、言い回しから不満な様子が窺える。

「ごめん。仕事が忙しくてなかなか連絡できなくてさ」

小夜と違い、こちらは嘘に慣れている。気付かれない自信もある。
「どんな仕事してるの？」

「事務だよ」

この質問に即答できるのは、これを聞かれたらこう答えようというのが大体決まっているからだ。特に俺のように毎回対象者に接触するセレクターは、大抵こういうことを前もって考えているのが普通である。

「そっか。昔からそうくんって大人しかたし、じっとしてる仕事は似合ってるかも」

「そうかな。でも事務って案外じっとしてるだけじゃないんだぞ」
話しているときなりぐいっと腕を引っ張られた。見てみると、

朱音がじっとこちらを見つめていた。

どうした、と問いかけてみるが、何も答えない。きつと構ってほしいのだろう。

「人見知りは直った？」

こくつと頷いた。

本当かよ、と笑いながら顔を見ると、ぷいっとそっぽを向いてしまった。頷いてはいたものの、この反応を見る限り、直っていないのではないだろうか。

「もしかして俺相手に人見知りしてる？」

「してない」

「本当か？」

顔を覗き込むと、逃げるように俺の腕で顔を隠した。

間違いない。俺が初めてここに来た時、小夜の背中に隠れてた朱音そのものだ。恥ずかしくてまともに喋ることすらできなくせに、傍からは離れようとしないのだ。まったく、よくわからない。

「ほら、朱音をいじめない」

小夜が呆れ顔になっている。

「いじめてないって。むしろ昔からいじめられてるのは俺の」
「そうくんはすぐ朱音をいじめるんだから」

言葉を遮ってまでそんなことを口にした。

変わらないな。たまに言葉が説教じみてて、まるで朱音の母親であるかのように妹想いで。

つつい笑い笑みが零れてしまう。

「なに笑ってるの」

言いながら小夜も薄っすらと笑みを浮かべている。

そう、こんな感じだ。しっくりくる。過去に戻ったかのような錯覚に陥ってしまうほどに。

「ねえしばらくはこっちにいろの？」

「そうだね。働き詰めでやっと大きな休みがとれたから。三週間くらい、できれば泊めてほしいかな」

「しょうがないなあ」

言いつつも悪戯な笑みを浮かべた。明らかに何かを企んでいる時の顔だ。

「台所なら空いてるから好きに使っていいよ」

案の定、小夜のいじめが始まった。誕生日が少し早いからという理由だけで、昔からお姉さん面をしていたのだ。

だがもうあの時とは違う。言われっぱなしでは終わらない。

「まあまあそんなこと言わずに。部屋がないなら小夜の部屋で一緒にでもいいから」

言い切る前に小夜は首を横に振った。一応言葉は最後まで聞いてくれたが、考えるまでもないということだろう。

「いや。なにされるかわかんないし」

「信用ないなあ」

しょうもない冗談を一通り繰り返した後、小夜は落ち着いた表情でこちらを見た。

「お父さんの部屋使って。今から簡単に掃除するから」

小夜が立ち上がってこちらに背を向けた。同時に背中まである黒い髪が揺れる。

その後姿が時間の経過を感じさせた。

「小夜髪伸ばしたんだね。似合ってるよ」

「いきなり何？ そう言ってくれるのは嬉しいけど……」

振り向いた小夜は呆気にとられた顔をしていた。

今度は対称的に髪の高い朱音の方を見る。

「朱音は髪染めたんだね。子供にはまだちょっと早いんじゃないか？」

「子供じゃないもん！」

拗ねたように頬を膨らませる。

変わらないものもあるけれど、変わったものもある。そういうことなのだ。

「小夜、朱音……ただいま」

ここからが始まり。今からどうなるかなんて想像も付かない。でも抗うしかないのだ。Sクラスに昇格する為にも

「03」 気配

こっちに来てから一日が経った。昔の住み慣れた家だということもあり、自分の家であるかのように落ち着いてしまっている。

今日は家で過ごした。二人の学校について行くわけにもいかず、部屋でぼうつとしていたのだった。

珍しく何も無い一日。強いて言うならば一本だけ電話が入り、エスケープ者がこの町に逃げ込んでいるという情報が入ったくらいだ。知っているセクターを数人送り込むので、接触を避けるようにとの注意があった。

ただいまー、という声が聞こえてきたのは、西の空が赤みを帯び始めた頃だった。大きな声の後に聞こえてくる小さな声。どうやら一緒に帰ってきたらしい。

「おかえり」

部屋を出て二人を出迎えると、何故だか小夜に睨まれてしまった。「ご飯まだだから。部屋に戻ってて」

別に夕食を催促したわけではなかったのだけれど、どうやら勘違いをされてしまったらしい。

二人は玄関から動かない。朱音が小夜の後ろに隠れるようにしながら、こっちをじっと見つめている。戻れ、ということらしい。

仕方なく部屋に戻ると、やっと家にながってくる足音が聞こえてきた。やれやれ、嫌われてしまったのだろうか。

鞆から二人の資料を取り出す。

おかしいな、まだ何もしていないのに。嫌われるには早すぎる。もし嫌われるのだとしたらこれからだろう。

資料を上から順に見ていき、やはり目が止まるのはあの項目だった。

「なんとか聞きださないと」

おじさんやおばさんが死んでいることは、あくまでも個人的な興

味で聞きたいだけ。理由を知ったところでどうなるわけでもない。ただ気になって仕方がないのだ。

……そうか。あんな反応をされるのは、昨日おじさんたちの話をしたせいかもしれない。昔の悲しみを思い出させて、それであんな態度をとられているのだ。

どうしたものか。昇格の為、仕事はきっちりこなさなければならぬというのに。

とりあえずは関係の修復に努めよう。今から嫌われては元も子もない。おじさんやおばさんの話はこれからはご法度。あとは普通を意識して振舞うのだ。

まずは料理を手伝うのが最善か。いや、それじゃ気を使いすぎだろうか。だがここで料理の腕を披露するのも悪くはない気もする。

迷った挙句、結局手伝うことに決めた。部屋を出て台所へ。

「小夜。俺も何か」

「あーもう！ 部屋で大人しくしててよ！」

また怒られてしまった。ただ視線は小夜ではなく別のところを捉えた。

何故か台所には朱音の姿もある。その朱音が、俺の声を聞いた途端に慌てるような素振りを見せたのだ。

「居候だからせめて手伝いだけでも、って思っただけだ」

「そつくんはそんな気を使わなくてもいいの！」

小夜は鍋をかき回していた手を止めてしまった。朱音はさっきと同じでじつとこちらを見つめている。

どうやら戻るしか選択肢はないらしい。少し不服だが大人しく退却することにした。

納得がいかない。それに朱音の妙な動きも気になる。二人が何かを隠しているという可能性が出てきた。だがそれは一体なんだ。

……わからない。だからといって探るのもなかなか難しい。ここは夕食の時間まで待つのが最善だろう。会話さえできれば聞き出すことができるかもしれない。

またもや時間を持て余すことになってしまった。改めて部屋を見直す。

目に入る全てが懐かしかった。おじさんの部屋には何度か入ったことがあったけれど、相変わらずだった。所狭しと本棚が並んでいて、小難しそうなタイトルの本がずらっと並んでいる。

おじさんは勤勉だった。真面目な性格だったけれど、ユーモアもあつた。いつも笑顔で、喋るのが上手で、その場の空気を和ませて……とにかく面白い人だった。初めて素直に尊敬できた人物でもある。

おじさんは酒を飲むと、毎回必ず同じような言葉を口走っていた。『おじさんは宗希のことが大好きだ。でもな、小夜と朱音にだけは手は出すなよ。あれは二人とも俺の将来の嫁だからな。だから今すぐ手は出さないって約束してくれ。じゃないと安心して成仏もできない。なんなら誓約書も作るぞ。ほら、とりあえずここに判子押せ宗希』

それは酔っているせいなのか、ただの冗談で言っているのかはわからなかった。でもおじさんの目は真剣そのもので、あの時だけは笑っていなかった。まさか将来本気で結婚する気でいたんじゃないかとも思えてしまう。

あの頃はなんとも思わなかったけれど、今思い出すと笑えてきてしまう。なんて馬鹿なやり取りだろうか。確か拇印でいいと言われて、刺身醤油に無理矢理親指を付けられ、誓約書という名のスーパ―のレシートに親指を押し付けられたのだ。

結局おじさんは小夜や朱音と結婚できなかったけれど、俺もあの時の約束は守れそうだ。二人は俺なんかが触れていい相手ではないのだ。

部屋がノックされ、その音で思考が停止した。どうやら夕食が出来る上がったらしい。

台所に移動し、食卓を三人で囲む。テーブルの上には既に料理が並んでいた。人数分の小皿に取り分けられ、すぐにでも手が付けら

れる状態だった。

食べながら適当な会話を交わし、思ったより怒っていないのではないかと思えてきた。

だが油断は禁物。無難な言葉を選んで会話していく。こんな風に言葉を選んで会話するのは久々だ。セクターになってからは、いかに相手にわかりやすく、かつ短く伝えるかということばかり考えていたからだ。

あっさりと夕食の時間が終わる。何を食べたのか、どんな味だったのかはほとんど覚えていない。

会話による収穫も何一つとしてなかった。おじさんたちのことも、何かを隠しているような動きも、結局全部がわからずじまいだった。「ねえそうくん」

声が掛かったのは、食べ終わってすぐのことだった。

小夜は神妙な面持ちで少し視線を下けている。何か重要な報告なのだろうと直感的に思った。

「わたし嘘ついた」

嘘と聞いて、すぐにおじさんのことだろうと察した。

小夜は嘘をつくのもつかれるのも嫌いだ。一日思い悩んでいたということも考えられる。

「本当はお父さんもお母さんも死んじやってるの」

もう諦めていたのにこんなにあっさりと。

さっきの言葉で予想はできたが、心の準備はできていなかった。

言葉を返せなくなる。

「お父さんは三年前に」

視界の隅に映る朱音を見ると、目が潤んでいるように見えた。今にも泣き出してしまいそうだ。このまま話し続けるのは少しばかり酷だろう。

「小夜、その話今は……」

と、朱音の方を見るように促す。

小夜はちらつと確認だけして、再びこちらに向き直った。

「朱音ももう子供じゃないもん。現実を見なきゃ駄目」

大丈夫だよね朱音、という小夜の言葉に、朱音は頷いた。とても大丈夫そうには見えない。

そんな朱音をよそに、小夜は話を続けた。

「お父さんは三年前に殺されちゃった。セレクションでね」

セレクション。その単語を聞いた途端、気持ち悪くなるような感覚を覚えた。

何も言えない。俺はセクターで、おじさんがセレクションで死んでいて

「お母さんはね、お父さんの後を追うように死んじゃった。やつと前向きになって仕事を始めたのに……交通事故だった」

おばさんも死に、小夜と朱音は残された。知らない間に二人は同じ苦しみを味わっていたのだ。

謝るべきなのだろうか。俺がいれば何かが変わっていたのだろうか。

……わからない。ただわからないのと同時に一つだけわかった。

それは俺が恥ずべき人間であるということだ。小夜と朱音はこの苦しみに耐え続けているのに、俺は復讐などと言って全てを憎しみに変えたのだ。時宮の言った弱いという言葉が今になって心に突き刺さってきた。

「わたしは制度もセクターもだいつきらい」

けれど間違っているとは思わない。弱かろうが自分を否定するわけにはいかない。

俺はこれからも時宮を恨む。それだけは変えてはならないのだ。

「ごめんね。いきなり暗くなるような話をして」

いや、としか言えない。その後の言葉が続かなかった。決して動揺しているわけではない。冷静ではあるが、さすがに頭の整理がつかなかった。

何を思ったのか、朱音が唐突に立ち上がった。うるうるとした目のままこちらに近付いてくる。

「クーにい、これ」

微かに震えた声で小さな紙袋を手渡された。このタイミングでのその行動は理解不能だった。

「誕生日、ここに来る前だったでしょ。遅れたけどわたしと朱音からのプレゼント」

その小夜の補足を聞いて啞然とする。

空気が読めていないとも取れる。でもこれは恐らく朱音なりの気遣いなのだ。暗い空気をできるだけ早く払拭しようと考えた結果なのだろう。

「嬉しくないの？」

黙っていたせいか、小夜がそんな言葉を投げかけてきた。

一方の朱音は悲しそうな目でじっとこちらを見ている。

「ごめんごめん。誕生日プレゼントなんて貰うの久しぶりだからびつくりしちゃって。ありがとう」

全てが繋がった。二人の様子がおかしかったのはこういうことだったのだ。小夜がやたらと部屋に戻れと言っていたこと、朱音が台所で焦る仕草を見せたこと。全てプレゼントを隠す行動だったのだと思えば合点がいく。

「もしかして部屋に戻って言ったのってこれがばれる可能性があるったからとか？」

「そうだよ」

やはりそうだった。馬鹿みたいだ。一人で勝手に勘違いしていたらしい。

「良かった。嫌われたのかと思ったよ」

なんで、と言いながら小夜は優しく微笑んだ。まったくなんでもう。

「開けてもいい？」

小夜が頷くのを見てから袋の中身を取り出した。出てきたのは、季節はずれの桜の花びらを象ったネックレスだった。

「そっくん洒落っ気がないからちようどいいかなって思って。かわ

いいでしょ」

小夜の趣味か。確かに好きそうだ。

何はともあれ、普通プレゼントを貰ったら喜ぶものなのだろう。昔の俺のならば間違いなく喜んでいたに違いない。

けれど今はもう違う。アクセサリーなんて付けていても邪魔になるだけ、なんて考えてしまっている。

「ところでこれってさ、どっちがプレゼントをネックレスにしようって思った？」

「え？ わたしが最初に買おうって決めたけど。どうして？」

「そっか。ちよつと気になってさ」

不必要な物の購入。小夜マイナス一点。

「くーにい、気に入らなかった？」

朱音は沈んだ顔をしていた。その顔に向かって気に入らないなどと言えるはずもない。

「そんなことないよ。ありがとう」

我ながら白々しい。

朱音の表情が戻ったと思ったら、今度は小夜が同じような顔に変わっていた。しかも視線はこちらではなく、窓の方へ向けている。

「どうしたの小夜」

聞いても小夜は答えてくれない。同じ顔でずっと窓を見ていた。

同じように窓の方を見ているが、小夜が何を見ているのかはわからない。

「ねえそうくん、そこに誰かいない？ なんだか昨日から覗かれてる気がするの」

少ししてから小夜はとんでもないことを言い始めた。

だが言われてみても人の気配は感じられない。気のせいだろうとも思えたが、案外馬鹿にはできない。昨日から、ということは俺が来てからということになる。そう考えれば可能性はゼロではないだろう。

「気にしなくてもいいんじゃないかな。近所のおばさんか誰かが通

りかかっただけじゃない？」

小夜は、そうなのかな、と言いながらこちらを見た。それは不安げな顔なのか、悲しげな顔なのか。

「……そうくん変わっちゃったね」

ぼつりと、でもこちらに聞こえるように呟いた。

何かまずい態度をとってしまったのかな、と考えてみるが、思い当たる節もない。プレゼントの一件も心の中で思っていることは口に出していないはずだ。

「そうかな。自分ではあまり変わってないと思ってるんだけど」

「ううん。変わったよ。絶対変わった」

どうしてそんな顔をするのか。いまいち理由はわからないけれど、小夜の気持ちが再び暗くなってしまうているのは手に取るようになる。

「そういう小夜だつて。最初見た時あまりにも綺麗になつてたから誰かわからなかったよ」

小夜は一瞬だけ喜んで、すぐに仏頂面が変わった。でも浮かれる気持ち完全に隠し切れていない。

「馬鹿じゃないの。そんなことばかり言つて」

まだ負の感情は完全には拭いされてはいなさそうだけれど、それでもさつきと比べれば大分ましになった。もう一押しだろう。

「本音だからしょうがない」

「もつうるさい！ あっち行つて！」

手に持ったスリッパを思いつきり投げ付けてきた。余程恥ずかしかったのか、顔が真っ赤になっている。

これ以上刺激すると命に関わるかもしれないので、スリッパをそつと床に戻し、立ち去ることに決めた。

「ありがとね。プレゼント」

例え不必要な物だとしても、礼を言うくらいは当然のこと。

小夜は戸惑いながらも返事をした。

それを聞き、居間を後にした。

部屋に戻って一人になると、小夜の感じた気配というのが気になってきた。カーテンを開け、窓から外を覗いてみる。しかしそこに人の姿を見つけることはできなかった。

もし本当に誰かがいるのならば、恐らくは協会の関係者。そして考えられる目的はただ一つ。昇格の邪魔をするつもりなのだろう。

……とても放っておけない。明日からは外出もしてみるとしよう。

「04」 見えない影

次の日、小夜たちの学校は休みだった。一緒にのんびりするのも良かったのだが、昨日のことがあるので、気晴らしという理由をつけて散歩に出ていた。

町は変わらずに静かだった。ゆったりとした時間が、少しずつ少しずつ流れていた。犬の散歩をするおじさん、公園で談笑するおばさん、無邪気に走り回る子供たちも、全ての人々が穏やかに、ただ静かに暮らしているのだ。やはりこちらの方が性に合っていると感じる。

冬の寒さも時間も忘れ、気付けば辺りは薄暗くなり始めていた。結局協会の関係者らしき人物と遭遇することはできず、周りに気配を感じる事もなかった。

諦めて帰る途中、家のすぐ傍の橋に差し掛かった時、前から見たことのある風貌の男が現れた。列車の中で会った、サングラスと野球帽の男だった。

「お。兄ちゃんじゃないかあ」

どうも、と軽く挨拶をする。最初はそれだけで立ち去ろうとしたのだが、男が立ち止まったので、こちらも足を止めることになってしまった。

手には酒のラベルが付いた一生瓶を持っており、街灯に照らされた顔はほんのりと赤かった。泥酔とまでは言わないが、少しばかり酔っているように見える。

面倒だと思った。できれば早く帰って落ち着きたいところだ。

「どうだいこの町は」

「いい所ですね。一日じやとても回り切れません」

そうかい、と言って例の笑みを浮かべる。何故こんなに不快感を感じるのか、自分でも不思議でならない。

「そういえばどこの宿に泊まってるの？」

「宿じゃないですよ。こちらに知り合いがいるので」

男は、知り合い、と呟き唸り出した。

「昔世話になった女の子二人がこの町にいて、その子の家にいるんですよ」

このままでは埒が明かれないと思ったので、説明を付け加えた。必要な補足だということはわかっているが、早く切り上げたいという気持ちもあり、仕方がないと思った。それにこの男に喋ったところでどうなるわけでもないだろう。

男は派手に笑い始めた。男にとっては余程面白いことだったらしい。

「いやあ二人とは。もてもてだなあ」

随分と気分が良さそうだ。酒の影響か、はたまたそういう人間性なのか。

男はひとしきり笑った後、酒を一口飲んでこちらに差し出してきた。それを丁寧に断る。

「まったく羨ましい限りだねえ。同級生が何かか？」

「一人は同い年です」

「同い年かあ。そういえばあいつはどうしてるかなあ」

顔の半分ほどが隠れているものの、憂いを帯びた表情に見えた。

男が再び酒を口に流し込む。酒を飲んだ後サングラス越しに視線が合うと、男は頭を掻き、恥ずかしさから苦笑した。

「いやね、おじさんにもむかし仲の良かった同級生がいてな。一人の女を取り合った仲間んだが、今じゃセレクターなんていうもんになってすっかり偉くなっちゃったって噂だ」

男の口元を見ていて、さっきと同じで笑っているのだと思った。けれど少しして、その口元は怒りから白い歯を見せているのだということを知った。

目が見えないせいか、あるいは別の理由があるのか、恐怖心を感ずる表情だった。

「あーほんとに憎くて仕方がない」

「憎い？」

聞き返すと、男ははつとしたように表情を強張らせた。そしてすぐにこまかすように微笑む。今度は本当に笑っている顔だ。

「いやいやなんでもない。いかなあ。酔ってるみたいだ」

頭を掻いてから酒を飲み、居心地が悪そうにこつちを見て、微かに声を出して笑った。

「噂なんて所詮は噂ですよ」

言う言葉が見つからなかったというのもある。が、それは自分に言い聞かす言葉でもあった。

男は、そうだなあ、と言いながら流れる川を見た。街灯が反射して水がきらきらと輝いていた。

男はその川を見ながら、ぐいっと酒を勢いよく飲んだ。飲み干したのか、瓶を軽く振り、その後にこちらを見た。

「それはそうと早く帰った方がいいんじゃないか？ もうこんな時間だ」

男が腕時計を見る。男には似つかわしくない、高級そうな腕時計だった。

「女の子二人の時に家に不審者でも入ったら大変だろう？」

男はそう言葉を続けた。それを聞き、昨晚の小夜の言葉が頭に浮かんできた。

家の傍に誰かがいるかもしれない

途端に不安になってきた。まさかとは思うが可能性がないとは言えないだろう。これには昇格がかかっているのだ。そんな事態だけは避けなくてはならない。

「こんな田舎ですから心配はないでしょうが……一応帰ります」

男はこちらの様子を察してか、表情を柔らかくした。でもそれはいやらしい笑みだった。

「ああ。気をつけて」

男との会話を追え、今度こそ家路につく。

遠くの空には上弦の月が浮かんでいた。今日の昼にもぼんやりと

見えていた月だ。

昼に見た青空に浮かぶ月を思い出す。セクター試験を受ける直前にも、あんな風に月が出ていた。

『合格すれば私を殺すチャンスはいくらでもあるだろう。……だが、合格しなければもう二度とチャンスはない。これがお前の最初で最後のチャンスだ』

地獄の試験を思い出す。とてつもなく嫌な過去だ。

もし時宮のあの言葉がなければ、途中で諦めていただろう。あんなのは試験でもなんでもないのだ。崖から落ちそうになっている顔見知りを突き落とす、仲間意識も何もあつたものじゃない生き地獄。正直に言つと怖かった。怖くて怖くて仕方がなかった。他人を裏切ること、蹴落とすこと、恨まれること。でも一番恐ろしかったのは、自分の変化だった。

殺しても殺しても、全く何も思わなくなっていたのだ。試験最終日には躊躇すらしなくなっていた。知らない人間だろうが、顔見知りだろうが、友人だろうが、家族だろうが……恐らくそんなものは関係なくなっていた。

家が見えてきて我に返る。今すべきは家へ帰ることなのにも係わらず、また必要のないことを思い出していた。全ては昼に月が出ていたせいだろう。昼の月は嫌なことを思い出させるのだ。これが何かの予兆でなければいいのだけれど。

玄関の扉を開く。靴を脱ぎ、ただいま、と言おうとした瞬間。口を開きかけたところで異様な雰囲気気付いた。

電気が付いていない。靴が散らかっている。そしてこの妙な静けさ。

目を瞑り、暗闇の奥へと耳を澄ましてみる。だがやはり物音一つしない。

嫌な予感がし、急ぎたい衝動に駆られる。だが誰かが侵入している場合、下手に物音を立てるのは得策とは言えない。優先すべきは小夜たちの安全確認だ。

暗闇の奥を見たまま靴を脱ぎ、足音を立てないように居間の前へと移動する。どこかへ潜入するスパイのように、壁に背を預け、ドアノブへ手を掛けて　そして一気に開いた。

ドアの開く音だけが虚しく居間の中へ響いた。部屋の中も暗闇に包まれていて、そこに人の姿を捉えることはできない。

細心の注意を払い、部屋の中央へ背を向けぬよう、後ろ手で部屋の電気を点けた。人の姿はない。大回りし、ソファの後ろなどの陰になっている部分を調べるが、そこにも誰もいなかった。

当てがはずれた。でも痕跡だけはしっかりと残されていた。

部屋は酷く荒らされている。棚が開けられ、窓が開放され、花瓶が無残に割れていて、置物が一通り床に落ちていて、壁に掛けられたカレンダーは破れていた。

物取りが入り、小夜たちに見つかって暴れた、と一つの仮定を試みる。逆上した犯人が小夜たちを追う。もし犯人が追いついたらどうするか。それは口封じの為に

ぞくつとした。最初から悠長に構えている時間などなかったのだ。

「小夜！　朱音！」

さっきまでの反動か。今度は正反対に気持ち焦り、家の中を転びそうになりながら全力で走る。

台所へ行つて電気を点けた。冷蔵庫が開けっ放しで、棚の中の食器類が床に散らばっている。

部屋の中をざつと見ても人の姿は確認できず、次にテーブルの下を覗いてみた。でもそこにも小夜たちはいなかった。

今度は浴室へ。荒らされた形跡はない。

しかし、嫌なことを想像していた。まさか浴槽の中にこの状況で小夜たちが見つかった場合どういう姿をしているのか、それが鮮明に思い浮かぶ。でもその映像をすぐに振り払う。ろくでもないことを考えるべきではない。

そつと近付いて中を覗いてみる。だがそこは空っぽだった。安堵から大きく息を吐き、もう一度走る。

一階は粗方調べ終え、二階へと上がった。

おじさんの部屋、すなわち今俺が使っている部屋を開けてみる。

荒らされた形跡も、小夜たちの姿もない。

残るは小夜と朱音の部屋。まずは近い小夜の部屋から覗くことにした。

そろそろだと覚悟を決める。見つかった時、そこで何を見ることになるのか。家を荒らした犯人が隠れているのか、犯人が小夜たちを人質にとって何かを要求してくるのか。それとも小夜たちはもう

意を決して小夜の部屋のドアノブを回した。

部屋の中はやはり暗かった。でも窓から差し込む月光により、全くの暗闇というわけでもなかった。

目を凝らさずともわかる。そこに二人の姿はあった。想像していた最悪の事態にはなっていなかった。

「そ、そうくん……」

二人は部屋の隅で怯えながら座っていた。

小夜は左手で朱音を抱きかかえ、右手では力いっぱいボールペンを握っている。

朱音は小夜の胸に顔をうずめ、ぶるぶると震えていた。

ほっとしたのはこちらだけではなく、向こうもそうらしい。強く抱き合っていた手から力が抜けるのがわかった。

小夜は心もとない武器をその場に落とし、両手でぎゅっと朱音を包み込んだ。

電気を点け、そこでやっと朱音が泣いていることに気付いた。声を出さないように、こうやって小夜の胸の中で声を押し殺していたのだろう。

こつちも力が抜けてしまう。その場に座り、なにがあったのかと聞いてみる。

「一階でガラスが割れるような音がしたから、二人でこうやって閉じこもってたの」

小夜の声は震えていた。その時の恐怖がまだ残っているのだろう。一方で俺は、小夜の言葉を聞いて苛立ちを感じていた。

死んだらどうするつもりだ。勝手に死んで昇格試験を台無しにするつもりか。やっとの思いでここまでこれたのに、と。

この小夜の判断には呆れてしまう。これについては小夜がマイナス三点。何もしようとしていない朱音はマイナス四点だ。

こんなところにいたら袋の鼠だし、武器だつてもっと効果的なものがあつたはずだ。それに冷静ならば基本的な対策だつてできたはずなのだ。

「閉じこもるにしても鍵掛けなきや意味ないでしょ」

「怖かつたからわかんなかったの！」

妹の前で弱みを見せないようにと気を張っていたのだろう。小夜はその緊張が一気に解けたせいかな、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

しかしわからないな。物取りならば、家主に見つかっていない状態でわざわざ荒らす音を立てる必要はないだろう。まるでわざと怖がらせる為だけにそうしたかのようなのだ。

「言つたのに！ 誰かが覗いてるって！ それなのにそうくんがっ！」

小夜は怒鳴り、下唇を強く噛み締めた。

混乱しているのだろう。落ち着かせなければならぬ。

「今回のことで放っておけなくなつたからちゃんと調べるよ。だからもうそんな風に怒らないで」

一言謝罪を付け足すと、小夜は横を向いてしまった。手の甲で目を拭う。その後にもう一度こちらを見た。

「調べるってどうやって？」

「考えるよ。早急にね」

誰かが覗いているという確率が高まつた。昨日も思った通り、定期的に俺の監視という線が濃厚だろう。相手は協会の関係者でまず間違いはない。

敵にするには厄介な相手。正体を暴くにしても一筋縄ではいかな
いだろう。

「くーにい、つかまえてくれる？」

小夜に抱きついたままの朱音が横目でこちらを見ている。不安そ
うな顔で、頼っている様子だった。

「うん。絶対につかまえるから大丈夫だよ」

時宮……と思ったがそれはないだろう。奴は忙しくてこんな所に
来る暇はないはずだ。だがどちらにせよ手ごわいということに変わ
りはない。相手は家の中を荒らして挑発をしてくるような奴なのだ。
「じゃあとりあえず家を片付けようか」

時宮の差し金か。そう考えるのが無難なのだが、どうも引つかか
るのだ。時宮がこんな幼稚な嫌がらせをするだろうか。

……いや、しないだろう。監視を指示したとしても、こんな風に
存在をアピールするような真似をさせるとは到底思えない。監視の
独断というならば話は別だが。

まあつかまえればつきりすることだ。誰の仕業で、どんな目的
があるのかも。こんなのはただの悪戯で済まされることではないの
だ。

「05」 接触

ここ数日の観察の結果、やはり監視されているのだという結論に至った。

姿を直接捉えたわけではないが、誰もいない時に外から気配を感じたり、隣に住んでいるおばさんは、見たこともない人間が家の庭から出てくるのを見たと言っていた。後姿しか見ていないらしいが、まず間違いなく何者かがいる。

相手はこちらが気付いていることを知らないだろうし、警戒心もそこまでないはず。そう考えればチャンスは今しかない。気付かれれば尻尾を出さなくなってしまう。

確信してから捕まえる方法を考えた。家の外で追い込むには、風呂場かトイレに誘導するのが一番いい。ちょうど家の裏に当たるその場所は、塀で囲まれているし、もしその塀を越えられたとしても、その向こう側にあるのは川。まず逃げるのは不可能だ。

そこで考えたのがこの作戦。家の中での会話が聞こえていると仮定して、居間で小夜たちに、風呂に行く、という宣言をする。会話を聞いていれば、外の監視も移動するはずだ。

それでも移動しない場合を想定して、小夜にテレビを付けさせる。これ以降の会話は、テレビの音のせいで聞こえないんだと思わせるのだ。準備はこれくらいで十分だろう。

実際に居間から風呂場へ移動するのは小夜で、俺は玄関で靴を履いて待機する。小夜は風呂に入ったらすぐにシャワーを浴び、俺はその音を聞いて一分程度待った後に外へ飛び出す。そこで居間の外に姿があるか確認し、あれば追って捕まえる。なければ裏の風呂場の外へ行き、そこにいる奴を捕まえる。

これを成功させるために下準備もした。決行日の前々日までは、実際に俺が風呂場へ移動していた。窓から様子を見ていれば、俺が移動する様子をしっかりと見ていたに違いない。

前々日になつて、そこで窓に暗幕を張り巡らせた。外にいる奴は警戒するだろう。これを単なる偶然と思わせる為、ここから二日は行動を起こさない。そうすれば恐らく三日目には気を抜いているはず。

そして三日目 決行日は今日である。

夜、三人で居間に集まっていた。食後の団欒。いつも通り適当な会話を繰り返す。

さつきから時計を気にしているのだけれど、今日は随分と時間が経つのが遅い。きつと頭の中で別のことを考えているからだろう。

小夜は演技なのか、なんら変わらぬ様子で話しかけてくる。

朱音は普段から静かだけれど、一層大人しくしている。座布団を両手で抱え、ぼうつと床を見つめていた。

いつまでもこうしていても日常は取り戻せない。そろそろ決行するでしょう。

「そろそろ風呂に入ってくる」

それが合図だった。

「また家主より先に入る気？ まったくそうくんは……」

小夜の小言を適当にあしらひ、居間のドアを開ける。

「もういいや。朱音、テレビでも見て待つてよっか」

朱音の返事を聞くと、小夜はテレビを付けてその場から立ち上がった。小夜がこちらに来て、揃って居間を出る。

小夜は風呂場へ歩いていき、こちらは正反対の玄関へと向かった。玄関で靴を履き、シャワーの音が聞こえるのを今かと待つ。

昇格の邪魔をする者は誰だろうと放っておくわけにはいかない。例え監視に別の目的があつたとしても、実際に今邪魔になっている。小夜たちは平常心を失ひ、このままでは正確に評価することができないのだ

シャワーの音が聞こえてきた。

これで終わりにさせてもらふ。今日を以て監視は終了だ
時計を確認し、扉を蹴破るように外へと飛び出した。

外は思ったより寒かった。凍えて意気込みまでもが萎んでしまいそうになる。しかし寒さなんかは負けてはいられない。

まずは居間の前を視認。人の姿はない。ということはやはり裏か。家の横に入り込み、裏側へと回る。家の壁と塀に挟まれているその場所に、一人佇んでいる姿があった。どうやら陽動はうまくいったらしい。

奴は最初こそ驚いた顔をしていたが、少しして余裕そうな顔に変わった。

「まんまと騙されたわけか」

黒いトレンチコートを着た、髪の毛長い女だった。ポケットに両手をつっ込み、堂々と立っている。逃げる動作も見せない。

正体を見破る為、鎌を掛けてみることにしよう。幸いシャワーの音はまだ聞こえているし、小夜に会話が聞こえる心配はない。

「他のセレクターに干渉することは誓約違反。それわかってやっている？」

風が吹き、女の前髪が目にかかる。女はそれを掻き揚げた。

「干渉はしていない。それにこれは時宮氏から与えられた特殊任務だ」

「なるほど。そういうことね」

どうやら正体は本当にセレクターだったらしい。そして時宮の使いであることも判明した。

時宮は余程俺のことが信用できないのだろう。弟子の俺ですら信用していないところが時宮らしいのだけれど。

「それで、なんの為の監視なの？」

「言うはずがないだろう」

まあそうだろうな。言えばこいつの首が飛ぶことになる。

「家の中を荒らすなんてやりすぎじゃないの？　なんであんなことしたの？」

前の質問はどうでもいい。本題はこっちだ。あんなことをする理由など思い当たらない。しっかりと全てを話してもらわねば困る。

でもその言葉を聞いた女は眉間にしわを寄せた。

「なにを言っているのだ？」

一瞬ごまかしかとも思った。けれど女は本当にわかっていない様子だった。

相手がセレクターだということを踏まえれば、ばれないように嘘をついているという可能性もある。でもこいつはさつき、時宮の命令だということは答えだし、答えられない質問には、言えない、と答えた。とても嘘をついているようには見えないのだった。

しかしだとすれば誰の仕業なのだろうか。一体どんな意味があるのだろうか。

考えている間に女の様子が変わった。上方を見たり、後ろを振り返ったりと、いきなり落ち着きがなくなったのだった。

「どうかした？」

その問いが気に入らなかったのか、女はこちらを睨んできた。

「貴様には関係ない」

「あっそう……」

周りを気にする様子。何者かの気配でも感じたのか。

まあ今はそんなことはどうでもいい。

「とにかくさ、監視するならばれないようにやってよ。素人に気付かれてるよあんた」

女の返事を聞くより前に、シャワーの音が止まった。これ以上会話をするわけにもいかない。

女が荒らした犯人ではないと決めて背を向ける。

時宮の命令ということは間違いなく俺の監視だ。ということは数日前の散歩の時にここに残る理由はなかったはず。すると家を荒らした犯人は別にいることになる。

だがこれはあくまでも仮だ。女の言葉が全て嘘だという線もまだ完全には消えていない。事実、散歩の時は周りを気にしていても気配を感じなかったのだ。この件については別で確かめることにしよう。

家に入り、居間のドアを開いた。ずっと待ち構えていたのか、朱音が不安そうな顔でこちらを見ていた。

「誰もいなかったよ。きつと小夜が神経質になってただけだから、もう気にしなくても大丈夫」

朱音の隣に座って慰める。朱音は素直だからきつとすぐに納得してくれるだろう。

この場にいただけで冷えた体が暖まってくる。部屋の中の暖かさは、外から戻ってくると尚実感できた。

そのままじっとしていて、全身が暖まってきたところで居間のドアが開いた。

「そつくん。どうだった？」

寝衣を身に付けた小夜は心配そうな顔で、濡れた髪のまま居間に入ってきた。急いで戻ってきたことが窺える。

「誰もいない。きつと疲れてるんだよ小夜」

「でもっ！ 家の中が荒らされたじゃない！」

小夜は心配そうな顔のまま声を荒げた。

「あれは泥棒。これからは戸締りをしっかりしよう」

小夜はそれ以上何も言わなかったものの、いまいち納得のいつていない様子だった。

頂垂れた小夜の髪から水滴が落ちる。

「いいから髪乾かしてきなよ。風邪引くよ」

小さく返事をし、小夜は居間を出て行った。すっかり意気を失ってしまったようだ。

だがこれも仕方のないこと。監視の存在を認めた場合、納得させる嘘など思い付かないからだ。

「本当？」

と、小夜のいなくなった場所で朱音が尋ねてきた。なんのことがあると考えていると、

「本当に泥棒？」

と言葉を続けた。

「そつだよ。だからもう大丈夫。戸締りをしっかりしてれば誰も入らないから」

視線を下げ、ぼうつと床を見つめている。不安が残っているのだらう。けれど寝ればこの気持ちも忘れられるはずだ。

問題は小夜。小夜は勘が鋭いし、心配性だ。確定的な何かがなければ安心はしない。だが時間が経てば今の気持ちは少しずつ薄れていく。監視の女がへまをしなければ、再び思い出されることはないだらう。

「さて、そろそろ風呂入って寝ようかな」

わざとらしくそんな言葉を呟き、その場から立ち上がった。

なにせよこれ以上邪魔をされるわけにはいかない。こちらからも動いてみることにしよう。

「06」 復讐心

真偽を確かめる為、翌日には本部へと戻ってきていた。

あの女は荒らした犯人ではないのだろうけれど、その決定的な証拠がほしかった。時宮に俺の監視であることを言わせ、そこで初めて確実なものとなるのだ。

時宮の部屋に向かう為、四階までやってきた。四階はSクラスセクター専用のフロアとなっている。たまにしか来ることはないの
で、なんだか新鮮な感じがした。

廊下はしんと静まり返っていて、人通りがほとんどない。それがSクラスセクターの忙しさを象徴していた。

視界の隅を流れていく、人の気配のしない部屋の扉。歩きながら眺めていると、その一つが開いた。出てきた人物と目が合うと、こちらに向かって微笑みかけてきた。

「御歳くんじゃないですか」

偶然にもそれは顔見知りの^{さえき}冴木だった。

電話で時宮がいることは確認したが、同じぐらい忙しいこの人がいるとは思ってもいなかった。

「お久しぶりです」

時宮とまではいかないが、この人も一部では有名な人だ。

セクター試験において、合格者ゼロというのはよく聞く話だ。だがセクター試験の史上で、一度だけ二人の人間が最後まで残ったことがあるという。冴木はその時に残った一人。ちなみにもう一人は時宮である。

二人残った場合、上の人間が優秀な方を選び、もう片方は再試験の権利を与えられる。その時にセクターの座を時宮に奪われてしまったのだが、時宮のライバルと謳われた冴木は、当然のごとく再試験にて合格した。

その時の繋がりが、冴木だけは未だに時宮と対等の立場にあるよ

うに思える。まるで友人であるかのように時宮に接しているのだ。あんな奴と友達になろうなどとは、随分と変わり者なのだろうが。「ここにいてことは時宮先生に用事ですか？」

「ええ。弟子を弟子とも思わない嫌がらせをされたもので」

冴木はそれを聞くと声を出して笑った。

やはりこの人は好きにはなれない。セレクターのくせに感情が豊かすぎるのだ。前にこの人がセレクションの後に泣いているのを見たことがある。セレクターに優しさなどいららないのに、知らない人間の為に涙を流していたのだ。

なんとなく気に入らないのは、あの涙を見たからだろう。きつと優しさとセレクターを両立をしているから好きになれないのだ。

「それは勘違いですよ。時宮先生はいつでもあなたの事を考えてくださっています」

そしてさらっとこんなことを口にしたりする。やはり好きになれそうにはない。

「そんな顔をしないで。大丈夫ですよ。そんなに悪い人ではないですから」

こいつに時宮の何がわかる。そっちはただの同期だろうが、こちらには人生を賭けて奴に関わっているのだ。

「つとと、僕はそろそろ行きますね」

よく見てみたら、冴木は封筒を小脇に抱えていた。どうやらここにいるのは、今日セレクションが行われるからという理由らしい。

「頑張ってください」

「ええ。お互いに」

顔を背ける瞬間、少しだけ表情が曇るのが見えた。セレクションが苦手なのは相変わらなずのようだ。

冴木が去るのを確認し、こちらでも反対側へと歩みを進める。

もし冴木が師匠だったら、俺も少しは変わったのだろうかそんなことを考えてしまう。もしかしたら憎しみなど忘れ、冴木のように両立することができたのではないのか、と。

くだいようだが、冴木ことは好きではない。だがどうしようもなく羨ましいのだ。きつと好きではないのも、妬ましいという気持ちからきているのだろう。

時宮の部屋の前に着いた。

嘆いていても仕方がない。現実を見よう。俺の師は時宮なのだ。

ノックをするするとすぐに返事があった。挨拶をしながら部屋に入る。奴は机上の書類の束と睨めっこをしていた。こちらには目もくれない。

「早急に用事とやらを言え」

ペンを走らせながら冷たい口調で言った。優秀な時宮は、相変わらず上から様々な仕事を押し付けられているらしい。

早急に、という言葉通り早速本題へ入ろう。奴がそう言った時は回りくどいことをしないほうがいい。

「ご存知の通り、今鈴白にて青羽姉妹と接触しています。そこに俺の監視としてセレクターを差し向けたのは時宮先生ですか？」

ペンを走らせていた紙を横の束に乗せ、次の紙へとペンを走らせる。動揺は見られない。

「そんな命令は出していない。彼女の独断だろう」

……動揺はしていないが、どうやら疲れているらしい。連日書類と睨めっこをしていたのだろう。

「だがもしその命令を出していたとして不都合があるのか？ お前がしっかりと仕事をこなしているのならば、見られていても問題はないだろう」

この言い草。それに俺は女などと言っていないのに、彼女と口にした。時宮らしくないミス。

いや、違う。わざとだ。わざとわかるように言っているのだ。まあどちらにせよ用事は済んだ。あの女は家を荒らした犯人ではない。

「まさか仲良しごっこなどしているわけではないだろうな」

その言葉と同時に、時宮はやつと顔を上げた。突き刺さるような

鋭い眼光をこちらに向ける。

「忘れるなよ御歳。お前はセレクターで、そしてこれは昇格試験だ」
念を押すように言い、再び視線を机上へと落とした。

用事は終わったのに去ろうとは思わなかった。まだ聞きたいことは山ほどあるのだ。ここでもう一つくらい聞いておいても罰は当たらないだろう。

「もう一つ質問してもよろしいでしょうか？」

「言ってみる」

言いながら、時宮はまたペンを走らせている。

「今回のセレクション、どうして彼女らが選ばれたのですか？」

ぴたっと、ペンを動かしていた手が止まった。何かを確認するように紙の上部から指でなぞり、少しして再びペンを走らせる。

「なんだ？ ランダムに選ばれた二人ではないとも言いたげだな」
「またもやわざとわかりやすいように言っている。さっさと一人になりたいのだろう。」

「いえ、ただ少し納得がいかないだけで」

時宮は顔を上げた。□元には薄気味悪い笑みを浮かべている。

「納得がいけない？ 姉妹が選ばれる事になんの問題があるというのだ？ メリットしかないではないか」

表情と言葉を不気味に思い、恐る恐る尋ねてみる。

「……メリット？」

ペンを置いて椅子に仰け反り、見下すようにこちらを見た。

「姉妹なら家族構成も同じだ。書類の量も減り、紙の節約になるだろう？」

完全にふざけてやがる。あの日のような弱い者を見る目。□元に浮かべた、憎しみを感じる笑み。

時宮はSSクラス。否定しようとしたけれど、もうこの事実
は揺るがないらしい。俺の遙か先を歩き、また力でねじ伏せよう
としているのだ

殺意が蘇ってくる。平静さを今にも失いそうになる。

俺は動揺しているのか？ 時宮の手で弄ばれているのか？

そこまで考えて小夜と朱音の為に怒りを感じていることに気付いた。そんな自分が腹立たしい。こんな風に思っているのは、二人を捨てて昇格を優先するという選択が無意味になってしまふ。その選択はもう終わったはずなのに、どうして今更両方を望むような真似を

「悔しいか御歳」

喋れば動揺が悟られる。だから答えずに黙っていた。

「だが仕方のないことだ。お前はまだまだ弱い」

弱いかもしれない。けれどももうAクラスセレクターなのだ。昔とは違う。

息を吐き、落ち着きを取り戻してから言った。

「いつまでも子供じやないですよ。俺だって強くなっただんです」

「自惚れるな」

時宮には珍しい、力の籠った口調だった。

「では聞かせてもらおう。お前は肉親を殺す覚悟はあるのか？」

肉親を殺す覚悟。小夜たちを殺す覚悟があるのか聞いているのだろう。

ここでもう一度再選択をする必要があるそう。Sクラス昇格か、二人を守ることか。迷いを完全に断ち切らなければならない。

俺は、やはり昇格を取る。迷いがあつたとはいえ一度した選択なのだ。覆しはしない。

「ありますよ」

もう一度覚悟を決めて答えた。捨てる覚悟と、殺す覚悟。

「そうか。ならばどれ程強くなったのか試させてもらおう」

「……失礼します」

そんな風に仰け反っていられるのも今のうちだ。いずれは必ず俺たを追いつ越してやる。

態度が表に出ないうちに、時宮の部屋を後にした。すぐに気持ちを落ち着かせる為、廊下の窓から外を覗いてみる。

濁りのない青空が、何処までもずっと続いていた。こちらの気を知らない雲が、その青の中を優雅に泳いでいる。

本当にその選択でいいのか、と自分の中で何度も問いかけられるが、それを振り払う。いいに決まっている。いつかは決めなくてはならないことだったのだ。

知らぬ間に見失っていた、進むべき道がやっと見えた。道が見えるのならば歩いていくのは難しくはない。

廊下を歩き、階段を下り、建物の外へ出た。

すぐ傍にある喫煙スペースでは、無表情で煙草を吸っている奴がいた。横を通り過ぎようとしたところでこちらに気付き、どこことなく嬉しそうな表情に変化した。

「御歳じゃないか。最近いないと思ってたが戻ってきてたんだな」興味がないから名前は忘れてしまったが、何度か喋ったことのあるセレクターだった。

軽く挨拶して去ろうとすると、まだ吸い始めたばかりの煙草を灰皿に捨ててこちらに近寄ってきた。横に並び、協会の庭を出口へ向かって歩く。

「また対象者に接触してるのか？俺みたいに書類だけで判断すれば楽だろうに」

俺から言わせれば随分と手抜きだと思う。だが実際こういうセレクターは珍しくはないのだった。

セレクターにさえなってしまうえば、どちらを選択するかは自由なのだ。あとは適当な理由を付ければ、それだけでセレクションは成立してしまう。

ただ新人のうちからそんな手抜きができるのかというと、それはまた違う。Sクラスになるまでは、必ず一人のセレクターに一人の師匠が付く。Bクラスになるまでは師匠が付きつ切りの状態で仕事をし、手抜きをすれば評価が下がり、手抜きの程度によってはセレクター免許を剥奪される。実際にそういう前例があった。

BクラスやAクラスになって、刑執行以外の全てを任せられるよ

うになると、こういう手抜きをする連中が出てくる。人の命を左右するなどと考えてはいない。ただ目の前に出された仕事を機械的に処理しているだけなのだ。

随分と前から思っていたことだが、刑執行とは随分な言い方だと思ふ。刑というのは本来罪を犯したものに科せられるものだ。だが協会は「無能な人間は存在しているだけで罪」などと考えている為、選死者に行うのを刑執行と呼んでいるのだった。

「早く昇格したいから手抜きしてる暇なんてないんだ。師匠にちゃんと仕事してるってアピールしとかないと」

当然本音ではない。話相手がどうでもいい奴とはいえ、相手に合わせるということも大事だ。実際はSクラスになってもすっかり仕事をこなそうと考えている。

「お前も大変だな。あんな優秀な師匠を持つちゃったんだもん」

「優秀というか有名って感じ。別にセクターに優秀とかないと思うんだけど」

しつかりやるかしつかりやらないか、ただその二通りしかない。

あとはどれだけ冷酷になれるかだ。

「言うようになったな。とても後輩とは思えん発言だ。さては時宮先生の首を狙ってんな？ お前」

当然だ。こっちはあんたみたいにBクラスで満足しているような人間ではないのだ。必ず時宮を越え、追放し あわよくば殺す。

何も返事をしないでいると、向こうも喋りかけてこなくなった。

そのまま無言で歩いていると、協会の門がすぐそこまでやってきた。

「おい、あれ」

と、そこでいきなり肩を叩かれた。門の方を指差したのでそちらを見してみる。

「あいつ昨日もいたな。御歳を訪ねて来てたんだが知り合いか？」

開放された協会の門。その前に茶髪の男が立っていた。

「いや、知らない」

覗き込むように協会内を見て、ちらつとこちらと目が合った。し

かし反応しないところを見ると、名前だけは知っていて顔は知らないといったところだろう。

「そうか。まああんなところにいたら、いずれ上の人間に見つかって捕まるんだろうがな」

捕まったらどんな目に遭うことやら。

目的は大方予想できるけれど、この際仕方がない。

「ん？ 行くのか？ 俺は面倒ごとはごめんだから行くぞ」

俺は茶髪の男へと近付いた。その男は冷静でいるものの、目に宿るそれは相当なものだと感じた。

この目は前に見た覚えがある。時宮に連れて行かれた小屋で鏡を見た時、俺はこれと全く同じ目をしていた。

「俺に用があるって聞いたんですけどどちら様で？」

男の纏う空気が一変したように感じられた。

「お前が御歳宗希か？」

「そうですか」

「やっと見つけた……姉ちゃんの仇……」

男は息を吐くように、力を抜きながら言った。息を吐き終えると、ぐつと全身に力が籠るのが見えた。

瞬間的に、来る、と直感した。

男はポケットから取り出したナイフを右手で握り、気合と共に右手を突き出してきた。

その攻撃を右足を軸にしてかわし、左手で相手の右手首を掴んで一捻り。それだけで簡単にナイフは落ちた。

気持ちだけが先走って、とても人を殺すまでに能力が及んでいない。まるで昔の自分を見ているようだった。恐らくは時宮もこんな気持ちだったのだろう。

動きを封じる為、腹部に一撃を加え、うつ伏せになるよう地面にねじ伏せた。

先ほどの男は、仇と口にしていた。予想通り、やはり俺が担当したセレクションの選死者の家族だ。担当したセレクターが俺だと

情報屋にでも聞いてきたのだろう。その時の選生者が情報屋に俺の名を売ったのだ。

「力なら勝てるとも思いましたか？」

なにせよ、無理だと教えてやる必要がある。こんなことをしても時間の無駄なのだ。

「残念ながら我々セレクターは戦闘訓練を受けています。並の人間に倒すことは難しいでしょう」

セレクターは命を狙われることが多い。だからみっちり訓練を受けているのだった。

「くそっ！」

敵わないと悟ったのか、男の目からは涙が溢れ出た。脆すぎる。

「泣いたところで現実是不変ならない」

「お前に何がわかる！」

「わかるよ。俺にはわかるんだ」

気持ちわかる。多少の同情もする。だがこのままだと、こいつに待っているのは哀れな未来だけだ。

すぐにこの騒ぎを嗅ぎ付けて誰かがやってくるだろう。そうすればこいつは、協会を嗅ぎ回っていた密偵だという扱いを受けて殺されてしまう。生き残れる可能性があるとするれば、その方法はただ一つ

「悔しいと思うならセレクター試験を受けさせてほしいって懇願してみればいい。もしかしたら試験を受けさせてもらえて、もう一回俺に復讐する機会がくるかもよ」

そう。その方法とは、セレクター試験に合格すること。

理由がどうであれ、セレクター試験に合格さえすれば、協会は優秀な人間だと認める。そうなればこの罪も不問となるだろう。ただこの男が試験を受けることを許可されて、なおかつ合格すればの話だが。

「お見事っ！」

わざとらしく手を叩く音が後ろから聞こえてきた。どうやらもう

嗅ぎ付けた連中がいたらしい。

後ろを見てみると、手を叩いているのは金髪の薄ら笑いを浮かべている男だった。

隣には坊主頭の真面目そうな男が立っている。

「御歳宗希か。その男は数日前から協会前で見かけ、目的をはっきりさせる為に泳がせていた男だ。今回このような事態を起こした為、我々が身柄を預かるう」

見たこともないセクターにまで名前を覚えられているなんて。

俺はいつの間にこんなに有名になったのだろう。

にしても泳がせていたというのは理解できない。何故すぐに拘束しなかったのだろうか。いつも通り拷問でもなんでもして吐かせればいいものを。

「セクターを名指しで探していたから客人とでも思ったのか？ それとも俺が協会の上の人間に目を付けられていたのか？ こいつが俺を名指しにしていたせいで、俺が外部の人間と繋がりがあると思われて、その繋がりをはっきりさせる為に泳がせたのだろうか。だとしたら、協会は俺を陥れようとしていたということなのだろうか。」

さすがに勘繰りすぎだとは思うが、もしも時宮を恨んでいることが上に知られているのならば、有り得ない話ではない。協会の偉人である時宮を狙っているのだ。協会の敵だと認識されるには十分すぎる理由だ。

「こいつが御歳宗希い？ へえ、じゃあこの若いのが時宮のおっさんの愛弟子かあ」

「そういうことだ」

「ふうん」

金髪がじろじろとこちらを見てくる。そのふざけた態度は気分が悪い。

「とても脅威になるとは思えないんだけどなあ。まったくあの人は何を気にしてるんだか、さっぱりさっぱり……」

あの人……時宮か？ また時宮が何か関わっているのか？

「無駄話が過ぎる。とっとと行くぞ」

坊主頭は、拘束した男をがっちり掴み、引っ張りながら協会の建物の方へ歩いていった。

「へーいへいっと。そんじゃま、また機会があればあ」

金髪はへらへらと笑いながら、坊主頭の後ろを付いて行く。が、少し進んですぐに立ち止まった。

「とと。その前に先輩セクターとして一つアドバイスねえ」

振り向いた金髪は、にたあと嫌な笑みを浮かべた。

「もし君の住んでいる家を荒らされたりしても気にしない方がいいよん。もうこれから先はそんなことないからねん」

家を荒らす。その言葉で、青羽家が荒らされたことをすぐに思い出した。

金髪のこの態度、確実に俺のことをなめている。犯人が自分だと言っている様なものだ。だが何故この男がそんな真似をしたのだ。考えても理由などわからない。

坊主頭が早足で戻ってきた。そして強めに金髪の頭を叩いた。

「いったいなあ。そんなに怒らなくなつていいじゃない」

「余計なことは言つな」

軽い口喧嘩をしながら去って行く。その様子を見ていたら頭が痛くなってきた。

誕生日から様々なことが起こりすぎた。不自然なセレクション、接触後の監視、そして家を荒らしたというセクター。

わからないことだらけだ。家を荒らすなどというやり方は時宮らしくない。けれど時宮の仕業でなければ、そんなことをされる理由も見当が付かない。時宮らしくないが、時宮の仕組んだことでなければ謎が多すぎるのだ。

青羽姉妹の方に問題があるとしたらどうだろうか。

……少し考えてみたけれど有り得ない。小夜や朱音は確実に恨みを買うようなことはしていないだろう。同情は大いにされているだ

ろうが。

やはり問題があるとするならばこちら側だ。SSクラスになった時宮が、俺がSクラスになることを阻止する為に動揺を誘っているに違いない。

外が暗くなった頃、やっと青羽家へ戻って来れた。玄関を開けるとすぐに小夜がやってきた。

「今日は遅かったんだね」

心配でもしてくれていたのだろうか。いつまでも子供ではないのに。

「ちょっと仕事で呼び出しがあつてさ」

「え？ 戻つてたの？」

小夜は驚いた顔をした。さすがに戻つたなどとは思つてもいなかったのだろう。

「そう。一旦戻つて、また鈴白に戻ってきた」

「ご苦労様。ご飯もうすぐできるから。でも寒いから先にお風呂入つたら？」

「そうさせてもらつよ」

お言葉に甘えて、風呂に入らせてもらうことにした。

小夜は随分と準備がいい。浴槽にはすでに湯が張っており、有難味を感じながらゆつたりと温まった。

風呂を上がって居間に入ると、朱音はソファに寝転んでテレビを見ていた。行儀が悪い。

一方の小夜はせっせと料理をテーブルに並べている。それを手伝いながら一つ問う。

「一人で作つたの？」

「そうだよー。いつもわたしが作ってるの」

まあわかつていたことなのだけれど、あの朱音の様子じゃ少しも

手伝っていないのだろう。普段から手伝っていないことも考慮して、朱音はマイナス六点だ。

小夜が朱音に料理ができたことを伝えても、テレビに夢中でしばらくはこなかった。きりがいいところまで見て、やっと食卓へやってきたのだった。

思えば今日は一度もご飯を食べていない。これが今日初めてのご飯だった。

「仕事、忙しいの？」

半ば食べ終えた頃、そんなことを聞かれた。

「それなりにね」

そうなんだ、と言いながら箸を口に運ぶ。小夜の表情は俺の言動に違和感を感じている風に見えた。小夜の中で何かが引つかかっているのかもしれない。

やはり休みをとったと言っておきながら戻るのは安直だったか。戻るにしても別の言い訳を考えるべきだった。少しばかり気が抜けているみたいだ。

「おねえちゃん。あたしもう寝るね」

一足先に食べ終えた朱音はさっさと台所を出て行った。その背中に、「おやすみ」と言う。

それをきっかけに会話が途切れてしまった。そのまま最後まで会話はなく、小夜が食べ終えた食器類の片付けを始めた。

手伝おうと言ったのが、手伝いは拒否されてしまった。だからせめて会話の相手だけでも、とその場に残ることにした。

「ねえそうくん。セレクション制度ってなんの為にあるのかな？」
話し始めるのを待っていたら、いきなりそんな疑問を投げかけてきた。表情が見れない為、その気持ちは知れない。

重い空気の中、流し台の水流の音だけが耳に入る。もし今何かを喋ったとしても、その音に紛れて一緒に流れていってしまいそうだった。だから一旦蛇口を締めるのを待ち、それを見計らって口にした。

「必要だからあるんだよ。人が増えすぎると問題も増える。食料や資源もそうだし、争いだって確実に起こる。犯罪とか、戦争とかね」
「なんだか政治家みたい」

反応を見る限り、答えが気に入らなかったらしい。だがなんと答えるのが正解なのか、その答えを導き出すことができなかった。

「でもやっぱりセレクション制度なんていららないよ」

小さな声でそう続けた。

時宮によって母が殺された時、俺も小夜と同じ考えを持っていた。しかし今では必要だと思ってしまうのだ。セレクターがいなければ無能者ばかりが増え続けていく。そんな世の中に未来はないのではないだろうか。

もう小夜とは分かり合えないのかもしれない。

「セレクターなんてただの人殺しなのに、どうしてあんなに権力があるの」

肯定するしかない意見だ。セレクターは人殺しだし、権力に疑問を持つのも当然だ。

「セレクターなんてみんな死んじやえばいいのに」

「ああ。そうだな」

本当にそう思う。俺も含め、全てのセレクターは死すべきだ。そういう世の中が来れば、地に満ちた憎しみの半分ほどは消え失せるのだろう。

小夜は食器を片付け終えて、食卓の向かい側に座った。

「そうくん、一つ聞きたい事があるんだけどいい？」

小夜はテーブルの上で手を組み、それをぼうつと見つめている。

小夜らしくない珍しい態度だった。

言うように促すと、おもむろに口を開いた。

「これだけはずっと聞きたかったんだけど、どうしていきなりわたしたちの前からいなくなつたの？」

あの雨の日の翌日のことだ。ほとんど理由を話さずに小夜たちの前から姿を消した。だからこの疑問はいつかくるとは思っていた。

「自分だけ浮いてる気がしてたんだ。子供ながらに迷惑は掛けられないって思ってたさ」

「そんなことない！　そうくんはわたしたちの大切な家族だったのに！」

小夜が声を大にして否定をしてくれる。その気持ちはありがたい。でも俺は、更に否定の意を込めて首を横に振った。

「俺はあの時から御歳を捨て切れないでいる」

俺の行動は、間違いなく青羽ではなく御歳だった。憎しみに突き動かされ、奴の背中を追ったのだ。

「……悲しいと言わないで」

「ごめん」

沈黙がその場の雰囲気支配する。

明るい話題を振って空気を変えよう。そう思っていた矢先、台所の入り口に気配を感じた。

見てみると、そこには寝衣に着替えた朱音の姿があった。

「くーにい……また出ていつちゃうの？」

今にも泣きだしそうな弱々しい声だった。

小夜はその声で朱音の存在に気付き、慌てたように言った。

「寝たんじゃなかったの？」

朱音が寄って来て、戻ってきた時のように服を掴んできた。

「嫌だよくーにい……」

その態度に参ってしまう。しかも大きな勘違いをしている。

いや、あながち勘違いでもない。セレクションの一週間前、それがタイムリミット。その日が来ればここを出て行くのだ。

「寝不足になるぞ」

無反応。じつと俯いたまま、服を掴んで固まっている。

「寝れないのか？」

問いに対して、やっと朱音は頷いた。

しばらくここで話相手をしてやれば寝付くだろう。朱音はまだまだ子供なのだ。

「そうくんが一緒に寝てあげれば？」

思いとは反して、小夜がそんなことを口走った。

ぽかんと口を開いて固まっていると、小夜はにこやかに続けた。

「それなら朱音は安心して眠れるだろうし。朱音もそれがいいよね？」

うん、と小さく頷いた。

さっきまでまったくの無言だったのに、それがまた面白くて笑えてきてしまった。

「ホラー映画を見た子供じゃあるまいし、一人で寝なさい」「うるさい」

頬を膨らませる。やはりまだまだ子供だ。しかし子供だからと言って、この歳の女の子と共に寝るといいうのは間違っている。

「小夜と一緒に寝ればいいんじゃないかな」

「わたしじゃ意味ないじゃない。そうくんがいなくなるのが心配だと言っててるんだから」

朱音は納得したように、こくこくつと二度頷いた。

小夜のこの顔は楽しんでいる顔だ。尚更この条件を飲むわけにはいかなかった。小夜には負けたくないのだ。

渋っていると、小夜は何かに納得したように一人頷いた。

「うん、じゃあ分かった。しょうがないからわたしも一緒に寝るよ。」

三人で

「待って小夜。それなにもわかってない」

「えーなんで？ いいじゃないたまには」

悪戯な笑みを浮かべている。そんな気はないくせによく言ったものだ。

「勘弁して。さすがに困るし照れるから」

「はいはいいいですよ。わたしは除け者で」

目を逸らし、わざとらしく拗ねた振りをした。それを見て頭を抱える。

「あのなあ……」

小夜はちらつと横目でこちらを確認し、吹き出すように笑った。

「冗談だよ」

そして次に妙に真剣な表情に変わった。

「朱音のことだけよろしくね」

本当小夜には敵わないな。ここだけ真面目に頼んでくるなんて卑怯だ。こんな風に頼まれてしまっっては引けない。

はぁ、とため息を一つ。渋々了承することにした。

「わかったよ……おやすみ」

「うん。おやすみ」

手を振る小夜の姿を最後に、台所を後にしたのだった。

「07」 消えない影

小夜は本当に働き者だ。そのお陰で、青羽家の冷蔵庫は空と云っているほどに食料がなくなっていた。そこで、普段特に何もさせてもらえないので、せめて買い物だけでも考えた。小夜たちが学校へ行っている間に、鈴白唯一の大型スーパーへ向かっていた。

今日の空は快晴。雲はほとんどなく、いつも以上に広々としていた。

最初はどうかと思っただけで、今はこの空のように気分は晴れている。少しずつ穏やかな生活を取り戻し、昔を思い出しているのかもしれない。こんなのはたった一ヶ月しか続かない、幻想のようなものに過ぎないのに。

……折角天気がいいのだ。もっと明るいことを考えよう。

小夜は買い物済ませておくことを喜んでくれるだろうか。いや、その報告をした瞬間に文句を言っつきそうだ。

「何もしないでって言っただでしょ！」

そういう声が今からでも聞こえてくる。

でも最初こそそうやって怒るのだが、手伝いたいという気持ちが伝わって、最後には喜んでくれるはず。あくまでもそういう計画に過ぎないのだけれど、その時の笑顔だけで満足できそうだ。

気付けば早足になっていた。早く笑顔が見たいとでも考えているのか。我ながら馬鹿らしい。

しばらくしてスーパーへ到着した。いざ来てみれば、当初の計画は潰れてしまった。

スーパーは賑わっていた。悪い意味で、賑わっていたのだ。「早くしろ！ すぐに食べられる物をできる限り詰めろ！」

人が集まっている中心には、髭をたつぷりと生やした男が立っていた。手にした刃物を女性に突き付け、店員へ指示を出している。その男はどこからどう見ても強盗だった。

人質となつてゐる女性は、世界の終わりを見るような顔で、じつと男の腕の中で固まつてゐる。

「早くしろって！」

数人の店員が袋に食料を詰めてゐる。人の命がかかつてゐるこの状況、言う通りにするしかないのだろう。

そんな中で俺は、この事件の中心となる人物を見て、全く別のことを考えていた。こいつはただの強盗だが、それだけではない。髭が伸びる前の男の顔を、俺は知つていた。

「ちよつと待つてください。今店中から集めさせていますから」

犯人から離れた安全圏にて、店員の一人である中年の男がそう口にした。

すると強盗は、目を見開いて怒り狂つた。

「ああ！？ 早くしねえとこの女ぶつ殺すぞっ！」

店員の言葉はわかりやすい時間稼ぎだった。冷静さのない強盗がそれに気付かないのが唯一の救い。だが我を失つてゐる人間はいつ何をするかわからない。

見ていられなくなった。この連中に任せていたら死人が出る。それにあの男がこんな凶行に走つたのは、協会の責任でもあるのだ。

「店員さん。早く袋いっぱいに食料詰めて持つてきて。大丈夫。もし奪われたら俺が全額支払うから」

中年の男に小声で伝えると、驚いたような顔をした。後ろからいきなり話しかけられたからか、話の内容にかはわからない。

きな臭い話にも関わらず、真剣みが伝わつたお陰か、すぐに食料がいつぱい入つた袋を用意してくれた。俺はそれを手に持つ。

こいつは例のエスケーパー者だ。この町に入つたという情報は聞いていたが、やっと姿を現した。今までどこかに潜んでいたのだろうが、持つてきた金も食料も底を突き、このような行為に及んだのだろう。

「てめえはなんだ！」

袋を手近付くと怒鳴つてきた。足を止め、袋を足元に置き、両

手を上げたまま後退する。

「これでいいかな」

「あ？ ああ……」

強盗が怪訝そうな顔に変わった。無理もない。今まで思うようにいかなかったことがいきなり思い通りになったのだ。

疑っているのか、人質を解放する素振りも見せないし、袋を取りに来ようともしない。心配しなくともこの距離で捕まえることは不可能なのに。

「その人は俺の家族なんだ。言う通りにしたんだから離してもらえない？」

すぐさまその女性が姉だという設定を作り上げた。男はその単純な言葉に納得したのか、一度だけ頷いた。

「出口までの道をあけさせる」

背後の人だかりに向かつて、強盗の言う通りをお願いをした。するとみな協力して道をあけてくれた。きっと家族だという設定が効いているのだ。

強盗が人質を取ったまま前進してくる。袋の置いてある位置まで来ると、もう一度周りを確認し、ゆつくりと腕の中の女性を解放した。

女性がその場でへたり込む。

強盗は食料の入った袋を拾い上げ、包丁をちらつかせながら進んできた。ゆつくりゆつくり進み、女性との距離が段々と離れていく。俺は捕まえるタイミングをじっと見計らっていた。

「なっ……なんでお前がここに……」

それは突然、発作のように起こった。強盗は人だかりの中の一点を見たまま、足の動きを止めた。目を見開き、ぶるぶると全身を震わせ、その手から包丁がするりと抜け落ちた。

男の見ている方向には人だかりがあるだけで、他には一切何もない。いや、男の位置からでは他の物など見えないだろう。

「頼む許してくれ……。もうなにもない。本当だ。家族も、金も……」

…」

全く何を言っているのかわからない。危ない薬物を使用している疑いも出てきた。

「見逃してくれえ……」

禁断症状で幻覚でも見えているのかもしれない。この状態なら何もできないだろうが、早めに確保した方が良さそうだ。

全力で走って強盗に近付き、地面にねじ伏せて動きを封じた。

男の力は弱々しかった。抵抗する素振りも一切見せず、体から震えだけが伝わってくる。

さて、捕まえたはいいがどうするか。セクターだとばれる心配はないだろうが、ここまで目立ってしまうのはよろしくない。

心配しながら考えていると、やがて一人の男がこちらへ近付いてきた。

「御歳、その男は私が預かる。お前は行け」

名前は忘れてしまったけれど、随分と前に顔を見たことのあるセクターだった。

それにしてもタイミングのいいことだ。この騒ぎを見ていたのだとしたら何故確保しなかったのだ。

そこまで考えたが、今回はこれでいいことにした。これ以上目立つわけにもいかないし、さっさと任せてしまいたかった。

足早に事件の中心部から抜けてスーパールの出口へと向かう。途中、人だかりの中から出てきた手に、ぽんと肩を叩かれた。

「大変なことがあったね」

サングラスと野球帽の男だった。騒ぎをずっと見ていたみたいだ。「ああ、どうも」

「にしても君、すごい勇氣だね。あんな危なそうな男を取り押さえるなんて」

男は言葉ではそう言ったものの、いやらしく映るその笑みは、馬鹿にしている風にも感じられた。

「いえいえ。ではちょっと急ぎますのでこれで」

さつきから注目されているのが落ち着かず、早口で伝えた。

「ああごめんごめん。忙しいのに呼び止めて悪かったね」

手で軽く合図してスーパーを出た。

結局買い物はできなかった。今日は何処へも行っていないことにしよう。

そう決めて帰路に就いた。

日が暮れて、小夜たちが帰ってきた。

結局計画は駄目で、小夜の笑顔を見ることはできなかった。だがそれは買い物をしてこなかったせいではない。

小夜は帰ってきた時から既に元気がなかった。いつもなら「今から買い物に行く」とでも言い出しそうなものだけれど、それもなかった。疲れた様子で、着替えもせずに、居間でぐったりとしてしまった。

その結果、珍しく小夜の手料理ではなく、出前の料理を食べていた。

何故疲れた顔をしているのか理由を聞いてみると、学校にいる時、じつと誰かに見られているような気配を感じていたかららしい。落ち着かず、周りばかり気にしていたら、精神的に参ってしまったという話だ。

思い込みだといいのだが、二つの可能性があるので否定はできない。

一つ目は、小夜のストーカーという線。小夜は容姿も整っているし、面倒見がいい上に、誰にでも優しい。そういう輩がついてもおかしくはない。

二つ目は、あの監視のセクターが見張っていたという線。今日一日周りを気にしていたが見かけた覚えはない。なんらかの理由で小夜に付いて行った可能性がある。

二つ目については後で確認するからいいとして、もしも前者だった場合が厄介だ。俺の存在を家で確認した場合、逆上する可能性がある。

そこまで考えて、以前の出来事を思い出した。

そういえば監視のセクターに接触した時、奴は周りを気にする仕草を見せていた。もしあの時に気配を感じていたのだとしたら、既にストーカーに見張られていたという可能性も捨て切れない。だとしたら、もう俺の存在には気付いているだろう。

変だな。俺の存在に気付いて小夜に手を出さないとすると、ストーカーでもないのか？

「そうくんごめんね」

前触れなく謝られて、なんのことかと確認する。

「心配かけちゃってごめんね」

黙って考えていたせいか、心配をしていると思われたようだ。

大分弱っている。こんな風に謝るのは小夜らしくない。

「いいよ。たまには家事を休んで楽しろってことだよ」

それに小夜のことをそこまで心配しているわけではない。心配しているのは昇格の方だ。

時間が刻々と流れていく。早く外の監視に確認したくて気持ちが急く。

朱音はいつも通りさっさと眠ってしまった。だから残るは小夜だけだった。

食後に毎日話相手をしているのが災いし、小夜はなかなか部屋へ戻らない。だからこちらから切り出すことにした。

「とにかく今日は早く寝なさい。はい、部屋に戻って」

「でも」

「いいからいいから。ゴミは俺が片付けとく」

ごめんね、ともう一度謝って、小夜は食卓を後にした。

いつもなら拒むところなのに、今日はあっさりと引き下がった。それが本当に疲れているのだということの証明でもあった。

ゴミをまとめて、分別して捨てる。その作業をしながら、とりあえずこれからのことを考えることにした。

まずは監視への接触だ。だがそれは小夜と朱音が確実に寝た後でなければいけない。万が一見られれば厄介なことになる。

一通りの片付けを済ますと、時間を潰す為に居間へと移動した。テレビを付け、二人を起こさぬようにと音量を小さくする。テレビではドラマがやっていた。俳優の芝居がかった台詞が頭の中を通り抜けていく。

他の可能性はないだろうか、と先程中断した思考を再び呼び戻した。

三つ目の線がないかと、頭の中を手探りで探す。だがその手は何も掴むことができない。

周りを気にしていたあれが気配を感じていたのだとしたら、その気配の正体はなんなのか。それと時宮との関係性はどうか。

情報がまばらで、点が繋がって一本の線にならない。

俺の監視とは別に、小夜たちの監視も仕向けたという可能性もある。だが小夜たちを監視してなんの得があるのかはわからない。

やはり時宮の考えは読めない。奴はこれから先、一体どんな手を使って邪魔をしてくるだろうか。昇格を阻止するのならば、このまま動きがないなんてことはないはず。どこかで必ず動くはずだ。

時計を見て、そろそろかと思いい立ち上がる。

とりあえず今はできることをしよう。線の一つを消すのだ。

足音をできるだけ立てないように歩いて外へ出た。

「いるんだろ？」

その一声を掛けると、家の陰から監視の女が現れた。

「……一体なんの用だ。私はお前と戯れる気なんてないぞ」

「安心しろって。俺だってそんな気はない」

冷え切ってしまった手をポケットに突っ込んだ。

「ちよっと聞きたいことがあってさ」

機嫌が悪そうな目でこちらを睨む。

嫌われたものだ。初めから好意など感じなかったが。

「今日一日あんた何してた？」

「貴様には関係ない」

予想通りの答えだった。それが少し嬉しくて、自然と口元が緩んできました。

さつきより鋭い目付きに変わったので、これ以上遊ぶのはやめようと思った。こいつが犯人だという仮定をし、話を先に進めることにした。

「あのさ、学校まで付いて行くなんてやりすぎじゃないの？」

「……なんの話だ？」

ワンテンポ遅れて返事が返ってきた。本気でわかっていない答えだと思った。

聞く前から予想していた通り、こいつは犯人ではないのだろうか。

「またまたとぼけちゃって」

おどけた体を装^てい、続けた。

「あんたは俺の監視なんでしょ？ 小夜に付いて学校にまで行く必要性はないと思うけど」

「……貴様はさつきから何を言っている？」

確信を得た。やはりこいつは犯人ではない。

「まあいいや。今後頼むよ」

女は考えるような仕草を見せた。

何を思ったのか気になるところだが、これ以上はやめておこう。

「そっぴやエスケープの奴が今日捕まったよ」

ごまかすように別の話題を振ってみた。

「それがどうかしたのか？」

「ありや、気になってると思ってたんだけど。この町に逃げ込んだって聞いてたでしょ？」

聞いてみるが返事もしやしない。

愛想のない奴だ。セレクターらしいといえばそうなのだが。

「……貴様は何を考えている？」

無視されたと思っていたら、いきなりそんな質問をしてきた。

「何？ 気になるの？」

わざとらしく言うと、女は再びそれを無視して続けた。

「敵だとわかっていながら何故関わりようとする。貴様は他のセレクターとは考え方が違うように感じる」

「それは違うって。俺はただ何も考えていないだけ。それに敵だなんて思っちゃいないさ」

女は心底驚いたような顔をした。敵視されていると思っていたのだろう。

「敵は時宮だけ。奴の取り巻きが何をしようが敵だなんて思わない」
女は鼻で笑い、目を逸らした。

「いけ好かない。眼中にもないというわけか」

決して眼中にないわけではない。ただ時宮の手下をいちいち敵視していたらきりがないのだ。

目を逸らした女は、しきりに落ち着きがなくなった。周りを気にする仕草を見せ始めた。

前と同じだ。やはり何かが

「……落ち着かない場所だな」

同じだと思ったが、一つだけ違った。それは女が言葉を口にしたということだ。

周りを気にしてみるが、視線や気配は感じない。どこを見ても暗闇があるだけだった。

「それはこっちの台詞だって」

冗談っぽく言ってみたが反応はなかった。これ以上話しかけても無駄だろう。

辺りを見回している女を置いて、家の中へと戻った。

その後も考え続けていた。犯人が一体誰で、どんな目的があるのか。

答えは出なかったのだが、代わりにもう一つの線が浮かんできた。家を荒らした金髪のセレクター。奴の目的は俺の監視ではない。

実際に俺がいない時に家を荒らしたのだ。奴の目的はわからないが、小夜たちにちよっかいを出しているというのは間違いないだろう。小夜が学校で感じた視線も、監視の女が感じている視線も、奴の作業なのかもしれない。

だとしたらこれ以上考えるのは無駄だろう。接点はないし、確認する術もないのだ。

「しょうがない、よな」

一人呟き、諦めて休むことに決めたのだった。

その面倒ごとは、エスケープが解決した直後に飛び込んできた。先に一つ断っておく。エスケープは頻繁にあるけれど、逃げ出さなくなるのは制度の対象者だけではない。セレクターだって逃げ出したことがあるのだ。だからこそ、こんな事態が起こるのも必然だった。

気持ちよく寝ている中、一本の電話で叩き起こされた。時宮からの着信で、すぐに何かがあったのだということを理解した。

眠い頭に今の状況を無理矢理押し込まれる。それを聞き続け、やっと言葉を返す機会がやってきた。

「先生。わかつていると思います。が今こちらにそんな余裕は」
『これは命令だ』

遮った時宮の言葉は有無を言わさぬ力があつた。

時宮はこちらの返事を聞かず、一方的に電話を切った。俺が言うことを聞くという確信があつたのだろう。

その判断は悔しいけれど正しかった。今回俺に選択権はない。逆らえばただじゃ済まないのだ。

鞆からバッジだけを抜き出し、それをポケットに突っ込む。そのまま駅へ向かい、列車に乗った。

セレクターが一人逃げ出した。

名も知らない、歳の近いセレクターだ。どんな事情があつたのかはわからないが、それを捕まえなくてはならない。協会は情報漏洩を恐れているのだ。

時宮の推薦によって、捜索隊の一人に任命されてしまい、潜伏しているという町を一日中探し回らなくてはならない。町の出口は既に固められ、完全に封鎖された町になっているらしい。

協会の行き過ぎたやり方には毎度驚かされる。たつた一人のセレクターを捕まえる為だけに、一つの町を封鎖してしまうのだ。

たった今送信されてきたメールを開く。すると、そのセクターの画像データが添付されていた。

冴木のように甘そうに見える。とてもセクターとは思えない顔をしていた。

携帯をしまつて窓の外へ目をやる。

空には暗雲が立ち込めている。その空は彼の運命を知っているかのようにだった。

しばらく外を眺めていると、突如一粒の雫が窓にぶつかって弾けた。それがきっかけとなり、続け様に雫が打ち付けてきた。

大雨だった。車窓から見える景色の全てが濡らされていく。

その雨の中、一駅、二駅と進み、何度目かに停車した時、見覚えのある金髪が姿を現した。

「お！ 御歳宗希じゃーん！」

今日は坊主頭と一緒にではない。ここで会ったということは、こいつも搜索隊の一人なのだろう。

「搜索隊なんだろう？ そうなんだろう？ おれもそうなんだよお」隣に座った金髪が絡んでくる。鬱陶しいことこの上ない。

だがまだ目的地まではある。どうせならこの機会を少しでも生かしてみよう。

「確認するまでもないんだけど、ずっと聞きたいことがあった」

と前置きをし、話をこちらから振ってみることにした。

「んー、なによお？」

金髪を睨む。

「やっぱり青羽家を荒らしたのはあんたなのか？」

金髪のにやにやとしていた顔が固まった。でもすぐにぶつと吹き出し、けらけらと笑い始めた。

「いやあごめんごめん。ちよつとした賭けをしてさあ。でもまさか君ほどのセクターがあんなことで慌てふためくとは予想外だったよお」

やはり聞くまでもなかった。しかもあの時の様子を何処かで見て

いたのだ。

そういうことならば、監視の感じていた視線についても、こいつと考えていいのかもしれない。

……いや、違うな。こいつは先程列車に乗ってきた。こいつは鈴白にいなかったことになる。

ということはあの坊主頭だ。こいつと繋がりがあるようだったし、騒がしいこいつよりは、寡黙な坊主頭の方が監視任務に向いているだろう。

「所詮はまだまだお子様ってことかねえ」

お子様はどつちだと言つてやりたい。ここまで落ち着きがない奴は他ではほとんど見たことがない。

「まあやった甲斐があったつてもんだわなあ。君がまだ人間だということが確認できたしなあ」

べらべらとよく喋る奴だ。これならば色々と吐かせるのも簡単かもしれない。

「それは誰の指示？」

「御歳宗希も噂で聞いたことあるつしょお？ SSクラスセレクト様。あの人に頼まれたのさあ」

やはり時宮か。ここまで手段を選ばないととなると、俺が昇格することを恐れているとしか思えない。

そのことに少しだけ優越感を覚えた。嬉しくて笑みを零しそうになる。

その気持ちを隠しながら、確証を得る為に質問を投げかけてみることにした。

「んで、荒らした目的は？」

昇格を阻止する為、という答えを期待しての質問だった。

「言うわけないだろお？」

しかし金髪は答えなかった。口止めされているのか、個人的な判断なのか。そのどちらにせよ、そこだけしっかりしているというのが鬱陶しい。

これ以上この件について聞くのは無駄だろう。そういうことは喋りそうにもない。

金髪はその後も一人で盛り上がりつて喋り続けた。時宮のおっさんがどうたらとか、御歳宗希がなんちゃらとか、名前しか頭に入っていない。

これだけ引つ切り無しに喋るくせに口は滑らせない。そこはさすがというべきか。

「ところでさ、今回逃げ出したセレクターってなんで居場所ばれたの？」

「なんかねえ、くそ真面目にセレクション対象者への接触してたらいいんだけど……あ！ 御歳宗希もそのくそ真面目に接触してる一人だっけ！ ごめんごめえん！」

質問に答えるだけで何故ここまで時間がかかる。

「そんでそんでわざわざ接触中に逃げ出したから、すぐにばれて町を封鎖されちゃったってわけ！ ばっかだねえ！」

確かに考えが浅すぎる。もっとタイミングを考えればうまく逃げる事ができただろうに。

しかし今の話、おかしい点があった。

「接触中に逃げたのがばれたのはなんで？」

普通はありえない。誰が何処でどんな行動をしていようが、そんなことを把握できるはずがないのだ。

「誰かさんみたいに目を付けられて、ずっと動きを監視されてたんだってさあ」

なるほどそういうわけか。それはそれは誰かさんと一緒にかわいそうなことだ。

「まあでもただの馬鹿かと思ってたけど、監視を振り切る頭はあるってことだよねえ。結構厄介かもねえ」

厄介とは言っても町のどこかにいることは決まっている。多数のセレクターが風潰しに探し回るのだ。きっとすぐに捕まってしまうだろう。

事情があるのだろうし、かわいそうだとは思ふ。だが悪いが俺も本気で捜させてもらう。本来こんなことをしている時間はないのだ。町に辿り着き、列車を降りる。金髪を無視して歩き、駅を封鎖している協会の人間にバツジを見せて、町の中へと足を踏み入れた。鈴白よりは栄えているが、ここも田舎だった。田園風景がまだ残っている。

すぐそこにある低い山は、頭から雨雲を被っている。あそこなんてどう見ても怪しい。潜むには恰好の場所だ。

町中の民家は他の連中に任せるとして、早速山へ行こうと思った。雨が降っているものの、この程度の山ならば、セレクトターの肉体試験に比べれば楽そうだ。

傘も差さず、整備された山道を奥へ奥へと進んでいく。傘はあると逆に邪魔になると考えた。

だがそのせいで体がどうしようもなく冷たい。それでも既に全身が濡れ切っている為、雨はそこまで気にはならなかった。

現状を考えてみると、焦っていると感じる。ここにいるという確証はない上に、下手すれば迷って死ぬ可能性だってあるのだ。時間を大切に思うことは悪いことではない。けれどやはり焦りすぎている。

足を止めて、一つ息を吐く。

大雨のせいで視界が悪い。ここはまだ整備されているからいいが、整備されていない道へ一步入れば簡単に迷ってしまうだろう。けれど整備されている道の近くに隠れているとも思えない。本気で探すならば山の全てを探索す気でいかななくてはならない。印を付けながら進むのも一つの手だが、手元にそんなものはない。それに簡単な印など、この雨で消し去られてしまうだろう。

一旦戻るか、このまま探すのかという選択。

やはり山を甘くみるのは危険だ。こんな天気だし、一旦戻って装備を整えてからの方が無難だろう。

すぐに答えが出て、来た道を引き返し始めた。

下山しているという感覚はない。似たような景色が続いているし、同じ道を何度も通っているような気すらしてくる。

歩いている時間はとても長く感じられた。既に登った時と同じくらの時間が経過しているのではないかと思える。下山の方が時間がかからないはずなのに、これはおかしい事態だった。時間の感覚が狂っているという話ならばいいのだけれど。

下っても下っても、一向に町に辿り着く気配がない。それどころか、周りに広がる景色が、登った時とは少しばかり違うような気すらしてきた。道は一本道だったはずなのに、どこかで迷った可能性がある。

これ以上進むのはまずいと直感し、もう一度登ろうと思った。登っていけば、さっきの同じような景色にもう一度遭遇できるはず。周りでは木々が天へ向かって生い茂り、道の両脇には草が生え広がっていた。

そういえばここ、最初の整備された道より狭い気がする。草が道を圧迫しているように感じるのだ。人の手の入った道というよりは、獣道という感じである。

獰猛な獣が棲んでいたらと思うと、気が気でなくなる。ただでさえ寒くて参っているのだ。勘弁してほしい。

不安になりながらも歩き続けた。しかしいくら歩き続けても、狭い道が続いているだけだった。

まだ頭の片隅にあった本来の目的は、もう忘れ去ろうと思っていた。そんなことの為に頭の容量を割く余裕はない。今は生き残ることだけを考えていればいい。

ここにきて初めて、傘を持たなかったことを後悔し始めた。体温がどんどん奪われていく。

息を切らしながら、とにかく我武者羅に歩いた。歩いて、歩いて、歩いて……そしてようやく、違う景色を見つけた。

剥き出しの岩壁が姿を現したのだった。ぼつかりと口を開き、暗闇を携えている。

洞窟だった。

休みたい一心でその洞窟の中に入る。だが中に入って少しすると、すぐに不安が襲ってきた。

これが獣の巣だという可能性がある。そこまで考えが及んでいなかった。

真っ暗な中、段々と目が慣れてくる。息をゆっくりと吐き、落ち着きを取り戻し、周りを見回してがさり、と。

暗闇の奥で、何かの動く音と共に気配を感じた。すぐさま動きを中断し、真っ先に洞窟の出口へと退避した。

「すみません。驚かせるつもりはなかったんです」

しかし、中からは人間の声が聞こえた。

足音と共に洞窟の出口へ来た男。顔を見て、自然と本来の目的を思い出させられた。

「本当にこの山にいたの……」

携帯にある画像データと同じ顔。逃げ出したセレクターだった。

偶然考えることが一緒だったのか。だがこんなところに潜んで生きていけるとでも思ったのだろうか。

「まさか君は――」

足を肩幅まで開き、警戒する仕草を見せた。戦闘態勢、というのが最も正しい表現だ。

「どうしてセレクションを前に逃げたの？」

「君には関係ないじゃないか！」

声色が変わった。敵だと認識されてしまっている。

「理由ぐらい聞かせてくれたっていいんじゃないかな」

向こうが戦闘態勢でもこちらは構えないし、睨まれたって睨み返しはしない。

そうして話し始めるのを待った。

「最初はやろうとしたんだ。でも僕にはやっぱり無理だったんだよ

……」

彼は戦闘態勢を解き、目に薄く涙を浮かべた。

「君にはできる？ 恋人と親友のどちらかを選ばなければならなくなつたとしたら」

SSクラスの被害、ありえないセレクションがここにもあった。境遇が同じで、彼の気持ちも事情もよくわかった。その二人がセレクションの対象者となり、最初は仕事だと割り切ろうと思ったが、いざ接触を試みたらそれができなくなつてしまつたのだらう。

「あんたの師匠が冴木さんなら良かったのに」

それは自然と出てきた言葉だつた。あの人なら彼をどうにかできたかもしれない。

「冴木……？」

ぽかんとした表情で聞き返してきた。

こいつは冴木と一緒に感情を捨て切れていない。俺と違ってまだ人間なのだ。

「あんたセレクターに向いてないよ」

その言葉に反論はなかった。自覚しているのか、静かに一度頷くだけだつた。

そんな彼を見ていて聞いてみたくなつてしまつた。同じ思いをし、別の選択をした人間の意見を。

「一つ聞いてもいい？」

返事をした彼に向かって、

「あんたはさ、このセレクションから逃げたことに後悔してる？」

そう聞いてみた。

「してるよ。本当は二人とも守つてあげたいのだけれど、それができなかつたことにさ」

彼に迷いは感じられなかった。真つ直ぐな目でこちらを見据えながら答えたのだつた。

「そっか。やっぱしてるんだ」

当然だろうな、と納得してしまう。

しかし彼は、訂正するようにすぐに言葉を続けた。

「まあそれでも僕が逃げ続ければセレクションが行われることはないし、結果守ったことになるのかな？」

それは違うのではないかと思った。けれど俺が彼のことを否定することはできない。

何も言えず黙っていると、彼は苦笑いをした。

「でもさ、僕は結局どっちの選択をしても後悔してたと思うよ」

こいつは確かに弱い。協会の人間の誰一人として味方はしてくれないだろう。でもそれは他の連中の感覚が麻痺しているからだ。

「なんか安心した」

やっと理解者ができた気分だ。

そう、どんな選択をしたところで結局は後悔するのだ。今回のことに最善の選択などない。

現実には足掻く彼を誰が裁くことができようか。少なくとも俺にはそんな真似はできない。

「俺は誰にも会わなかった。そんじゃ」

「えっ……」

去ろうとすると、彼は戸惑いの声を上げた。そんな彼を残し、背を向けて

「待って！」

そこで呼び止められた。立ち止まり、雨に打たれながら彼の顔を見る。

「君は、後悔したことないの？」

なんのことかと聞き返すと、

「セレクターになったこと」

と続けた。

まったく馬鹿な質問だと思った。そんなのは決まっている。

「しないわけないじゃん。今だって後悔してるよ」

セレクターになったことも、時宮の下についたことも……。だがそんなことを言っていてはきりが無い。

「後悔しているのに続けられる理由がわからないよ。君は強いんだ

ね」

「強くなんかない。ただ俺には成し遂げなきゃならないことがあるから」

その言葉に、彼は何も言葉を返してこなかった。当然こちらの事情は知らないし、理解できなかったのだろう。

「失言。まああんたと俺は違うつてこと。そんじゃ」

彼は礼を言ってきた。礼を言われる理由など何もない。頭を下げる彼を残し、踵を返した。

「09」 過去

迷いながらもなんとか山を下ることができた。その時にはもう日が落ち、大雨が嘘のように止んでいた。

結局夜まで捜しても、彼は他のセクターに見つかることはなかった。「封鎖する前に別の町へ逃げたのかもしれない」という結論に至り、今回の搜索隊は解散となったのだった。

疲れ、冷えて、汚れきってしまった体で、やっと青羽家へ戻ってこれた。ここを出てから数日が経った感覚すらある。

玄関を開けると、小夜の出迎えがあった。前みたいに体を労わって風呂を勧めてくれるのだと、そう思っていた。

「ねえそくん。ちよくちよくどこかに出かけて行くけど何処に行ってるの？」

けれど第一声は質問だった。言葉を発した小夜は、似合わない暗い表情をしていた。

様子が明らかにおかしい。前から何かに勘付いてはいたが、それが確信に変わっているようにも感じられた。

「前も言ったけど、仕事でちょっと呼び出しがあったんだよ」

「でもそくん休みとってたって言ったじゃない」

「そのはずだったんだけど、どうしても人手が足りないらしくてさ」

「そうなんだ、と納得したような言葉を放った。でもその表情は全く納得していない。目を逸らさずじつと、睨むような目付きでこちらを見ているのだった。」

「まあいいや。それで一つ聞きたいんだけど」

これまでの態度も踏まえ、嫌な予感がした。

「そくくんの鞆の中にあるあのコートって何？」

最初、小夜の言っていることがわからなかった。小夜の口からそんな言葉が出てくるとは思っていなかったのだ。

だが間違いなく小夜は、鞆、コートという単語を口にした。そし

てそれはもう全てを悟っているということに違いがなかった。

「ねえ、あの背中印ってセクターのだよね？」

小夜はお構いなしに詰め寄ってくる。

「どうしてそうくんがそんな物持ってるの？　ねえ」

納得がいかなかったのは小夜だけではなく俺の方もだった。いくら世話になったからと言っても、それはやりすぎだと感じた。

「……どうして勝手に鞆の中を見たんだ？」

「質問に質問で返さないで！」

遂に小夜は声を荒げた。目には微かに涙を浮かべ、それが心の内の動揺を示していた。

「そんなに俺のことが信用できなかった？」

「違う！」

首を横に振り、違う、違う、と何度も繰り返す。

「違うじゃないしょ」

「でも事実そうくんはわたしたちを裏切ってた！　わたしたちのお父さんがセクターに殺されたってことを知ってるくせに！」

「ああ。知ってたよ」

その通りだった。小夜自身の口から聞いて知っていたのだ。全ての事情も、心の傷も。

「そうくんはわたしたちを嘲笑ってたんだ！」

「否定はしないよ」

嘲笑ってはいない。だが昇格に利用しようとはしていた。きっと小夜にとっては同じくらい腹立たしいことだろう。

「どうして？　ねえ、どうしてそんな風になっちゃったの？」

俯いた顔からは、ぼろぼろと涙が落ちる。

このままでは冷静に話もできない。落ち着かせることが最善だろう。

ポケットからハンカチを取り出し、それを小夜に差し出す。

「泣かれると話にくい。これ使って」

震えていた小夜の動きが止まった。顔を上げ目を見開いた。

「どうして今そんなことするの!? おかしい! 絶対におかしいよそうくんっ!」

悲痛な叫びと同時にハンカチを叩き落された。小夜は顔をひどく歪めている。

そんなにおかしいことだろうか。言い合いをするくらいなら冷静になって話したほうがお互いの為になるのではないだろうか。

「どうしてそんな風になったかって、そんな風つてのがなんなのかよくわからないけど。でも原因があるとするならばセレクターになったからじゃないのかな」

ハンカチを拾いながら答えた。

小夜は目を擦り、鼻を睨り、泣き止もうとしているのだということとはわかった。けれど涙の勢いは先程より増している。

「人には色々あるんだよ。小夜に色々あったように、俺にもさ」

「だってそうくんは何も話してくれないっ……出て行った詳しい理由だって……」

それを言えと言うのか。時宮が小夜たちを殺そうとしていたからなどと。

……言えるはずがない。言えばどうなるか、そんなのは決まっている。小夜は自分たちのせいだと思い込み、なんらかの償いをしようとするだろう。

そんなのは嫌だ。小夜たちとは対等でいたいのだ。

「セレクターなんて……みんなおかしいっ……」

涙をぐいっと拭い、涙目で真っ直ぐこちらを見た。

「弱い人を殺すただの悪者なのにつ!」

敵意を感じる目だった。遂に小夜ともこんな風になってしまった。でもこちらだって辛かったのだ。元は弱者の側にいたが、それでは永遠に奪われるだけだった。ならばどうするか。

権力を手に入れるのだ。

だからセレクターになったし、その為にはSクラスになる必要もあると思った。そしてSクラスになる試験が今回。

……どうしろと言うのだ。権力を持つ為に今は従うしかないじゃないか。

Sクラスになって独り立ちすれば、書類でどうとでもごまかせる。だがそれまでは、師匠である人間が刑執行をするし、最終的な提出書類をまとめる。

どうしようもない。いつか救える命を救う為に、今は昇格していくしかないのだ。憎き時宮に従って

「俺だって色々あったんだ……」

頭の中で何かが弾けた。川の水が氾濫するかのように、今までの様々な出来事が一気に頭の中に流れてきた。

「母親をセレクターに殺されたり、それにあの日だって……」

事情があるのだ。人が行動を起こすには、必ず何かがあるのだ。

「小夜に俺の気持ちなんてわからないんだよ！」

口は止まらなかった。その場に小夜を残し、外へと飛び出した。

冷えた空気の影響か、冷静さはすぐに戻ってきた。どうしてあんなことを言ってしまったのか、どうして外へ出てきてしまったのか、自分でも理解ができなかった。

「愚かだな」

腕組をした監視が家の壁にもたれていた。

「まったく返す言葉もない」

自嘲的な笑みを浮かべながら空を見上げる。

空に輝く星は、いつもより悲しげな光を放っている。どんな星も一人ぼっちで、見つけてほしいと自己を主張するように輝いている。そんな風に映った。

「どうしてだろう。分かり合いたいなんて思っていないはずなのに」「……愚かだな」

監視はもう一度同じ言葉を呟き、壁に預けていた体を持ち上げた。庭を外に向かって歩いて行き、やがて町の暗闇の中へと姿を消した。今の俺には監視の必要もないという意味か。

監視のように町へ出たかったが、今の俺には行き場所などない。

今日はここに泊めさせてもらおう。

小夜と顔を合わすのが気まずくて、その場で少しだけ時間を潰してから部屋に戻った。そして倒れこむようにして眠りに落ちたのだった。

とにかく不安で怖かった。

時宮はいつでも俺のことを見下ろしていた。今にも殺しそうな目付きで、それでも手は出してこなかった。機会を窺っているのだと、いつか必ず殺してくるものだと思うていた。

「人間も所詮は生命の一つ。蚊を殺す事も、人間を殺す事も、私は同等だと考えている」

時宮は言った。平然と、天気の話でもするかのように。

「そして強者が弱者をどう扱おうが自由。弱肉強食、ただの自然の摂理だ」

微かに笑みを携えているようにも見える。こいつは人を殺して楽しんでるのだ。

許せなくなつた。母を殺して楽しんだのだと、人の悲しみを喜んでいるのだと思うと

拳を強く握った。大声で気合を入れ、時宮の懐へと飛び込む。

時宮はこちらを一瞥すると、蹴りを見舞ってきた。それは寸分狂わずみぞおちをとらえ、無様に唾液を垂らしながらその場に蹲った。痛みに耐えながら見上げると、時宮はいつものようにこちらを見下ろしていた。

「お前みたいな平和ボケした人間に他人を守ることなどできんだ」
髪を掴まれ、

「自分から目を逸らすな。お前は弱い。お前に守ることなどできん」
後ろへと吹き飛ばされた。

それでも諦めたくはなかった。どんな無様な姿だろうが、最後に

勝てばそれでいいのだ。

立ち上がり、なんとか戦おうとする。しかし時宮に見られただけで、そこから行動に移すことができなくなってしまった。

時宮を恐れている。

信じたくないが、手足は震えていた。恨みを思い出そうとするが、恐怖がその邪魔をする。

「いいか覚えておけ」

言いながらこちらに近付いてきた。慄き、その場から退くことすらままならない。

「今の貴様に私を殺すことはできん。私と貴様とでは格が違う」

奴は、背筋が凍りつくほどに不気味な笑みを浮かべていた。

「お前が平凡な日常とやらを送っている間、私は人を殺していたのだ」

時宮の恐怖をその身に叩き込まれたのだった

時宮が目の前まで来たところで、真っ暗闇へと投げ出された。一瞬何が起きたのか理解できない。

そこは部屋だった。本のたくさん置いてある部屋だ。

意識がしつかりしてくると、今置かれている自分の状況をやっと思い出すことができた。どうやら夢を見ていたらしい。殺される恐怖を目の前に感じ、そのせいで目を覚ました。嫌な汗が全身に滲んでいるのがわかる。

余程焦って起きたせいかわ、体は勝手に起きていた。見ているのは天井ではなく、本棚だった。

不安が残っていて、起きた今でも、すぐそこに人の気配を感じる。「あ、あのっ……ごめんなさい！」

体がびくつとした。気配を感じるのは夢のせいではなかった。部屋の入り口に、立ったまま固まっている小夜の姿があった。

「小夜……？」

部屋の電気を付けてみる。明るくなったその場所で、小夜は悲し
げで、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

その顔を見て思い出す。

そうだった。俺は小夜と喧嘩をしたのだ。

「謝らないでよ。あれはお互い様。あんな風に怒鳴るなんて……ご
めん」

小夜が恐怖と不安の夢から引つ張り出してくれた。時宮の呪縛か
ら解放されたような気分になり、安心感を感じていた。

こんな安心感を、前にも一度もらった覚えがある。言っまでもな
く、この家に初めて来た時のことだ。

「あれ？　そうくん涙が……」

えっ、と戸惑いながら目に手を当ててみると、そこは確かに湿っ
ていた。

「いや、多分汗」

確かに涙だった。それを悟られたくはなかった。いや、自分が
信じたくなかったのだ。

「……くーにい、大丈夫？」

小夜の後ろからひよっこりと朱音が姿を現した。

小夜の奴、朱音まで連れてくるなんて

「ねえそうくん。わたしたちもう隠し事は嫌だよ。そうくんがセレ
クターだって知ってあんなこと言っちゃったけど、でもそうくんは
やっぱり家族なの。わたしたちと会う前のことも全部教えて？」

小夜たちには昇格の為だけに関わっている。だからこそ、「人を
信じない、心を開かない、無駄口を叩かない」と最初に決めた。

それなのに拒否する気にはなれなかった。全て話してしまおうと、
そんな気になったのだ。

小夜の悲しい顔、朱音の悲しい顔、二人の泣き顔……。こちらに
来てから、そんな顔ばかりを見ている気がする。

もうそんな顔は見たくなかった。あの時俺がそうしてもらったよ

うに、二人の顔を晴らしてあげたい。

「話すよ、全部」

全てを知ってもらおうと思った。

長くなると前置きをし、昔を思い出しながら語り始めた。

「元々俺と母さんは父親から暴力を受けてた。俺はまだ良かったんだ。母さんが俺を庇ってくれたから。その代わり母さんは本当にひどい傷を負ってた。それだけでも可哀想なのに、母さんはある日セレクションの対象者に選ばれたんだ。納得できなかったよ。なんで優しい母さんがって。けどそれが紛れもない現実だったんだ。そのセレクションで母さんは選死者になった。辛かったよ。本当に辛かった。あと怖いっていう気持ちもあったかな。父親と二人で残されてどうなるんだろうって。いつかは殺されるんだろうなってさ」

朱音が横に座り、そつと手を握ってきた。ぎこちなく笑い、その笑顔からは優しい気持ちが伝わってきた。

「母さんのセレクションが行われた日、不安になりながら部屋の隅で震えてた。で、夕方頃家の扉が開く音がしたから、父親が帰ってきたと思って泣きそうになった。どうしよう、どうしようって。でもそれは違った。見たこともない、背の高い男が家に入ってきた。その男は、『お前の母親のセレクションを担当した時宮だ』って名乗った。普通さ、セレクターが家族に名乗り出たりなんかしないよね。今考えるとほんとに挑発的だと思うよ。なんの目的で来たかはわからないけど、時宮は『叛逆の罪を犯したお前の父親も殺した。お前にもう家族はいない。これが誰のせいかわかるか？』そう尋ねてきた。子供だったとはいえ、そんなもんは聞かれるまでもなかった。恨みが一気に膨れ上がったよ。でもそれと一緒に、父親を殺したということで安心感を覚えてたんだ。ほんと笑えないよな。親が殺されて安心してるなんてさ」

自嘲する姿に不安を感じたのか、小夜も傍に寄ってきた。目の前に座り、目を真っ直ぐと見つめてきた。

「結局俺はその質問には答えなかった。黙ってると時宮が、『着い

て来い』って一言だけ言って外に出て行つた。母さんの仇ではあつたけど、これからどうしていいかわからなかったし、着いて行くしかなかったんだ。外に出ると、ぴかぴかの黒い高級車が止まっていた。その車の前にはもう一人男が立ってて、時宮と何かを喋っていた。話が終わって俺はその車に無理矢理押し込まれた。時宮は、『悔しかったら私を殺しにこい。どんな手を使ってでも』って言って車のドアを閉めた。それが時宮の別れ際の言葉だった。車が走って行く中で、俺は時宮の顔を思い浮かべてた。忘れない為、母さんの仇をいつか取る為に……。そうしているうちに車が停まった。そこは施設だった。いわゆる養護施設ってやつ」

「もしかしてそれって……」

勘付いた小夜が口にする。

「そう、それが小夜たちのおじさんが働いてた施設。俺さ、情けないことに馴染めなかったんだよね。知らない奴が苦手でさ、同年代の奴が話しかけてきても無視してた。それで気付いたら一人ぼっちで、唯一頻繁に構ってくれるのはおじさんだけだったんだ。おじさんと遊んで、父さんってこんな感じなんだって、それがわかったし、楽しくてしょうがなかった。それで施設に入ってどのくらい経ったかはわからないけど、いきなりおじさんに、『一緒にうちに行こうか』って言われて、この家に連れて来られた。『これからここが君の家だよ』って。最初はわからなかったけど、おじさんの気持ちを知ったら嬉しくなった。あとは小夜たちが知ってる通りだよ」

「待つて。まだ聞きたいことがある」

「わかってるよ」

全部を話すと決めたんだ。逃げはしない。

「青羽家を出て行く前日の学校帰り、雨の中で時宮がいきなり目の前に現れたんだ。殺しに来ないから痺れを切らしたんだろっね。あの時は小夜たちといえるのが楽しかったし、もう関わりたくはなかった。でもその顔を見てたらあの日の気持ちまで蘇ってきてさ。手元にあった傘で殴ったけど当然返り討ち。時宮が、『もしこれから先、

大切なものを失いたくないというのならば私に付いて来い」なんて言ったから、着いて行かないと小夜たちを殺すつもりなんだって思ってた。で、次の日に小夜たちに別れを言って、出て行ったってわけ」「やっぱり嘘だったんだね。服が汚れた理由を聞いた時に転んだって言ってたのは」

それを聞いて笑えてきてしまった。

「俺そんなこと言ってたっけ。馬鹿みたいだな。そんなばれな嘘ついて」

過去の自分の愚かさと思う存分笑い、満足したところで話を続けることにした。

「そこから列車で協会のある町まで行き、町外れの小屋に連れて行かれて、七年間時宮と暮らした。時宮と暮らしたって言っても、時宮は毎日顔を出すだけで、実際は別の場所で暮らしてたけどね。その中で何度も殺そうとしたよ。小屋にやってきた時宮に奇襲したりとか、でも結局殺せなくて、その度に体を鍛えて、勉強も頑張った。勉強すれば殺し方が思い浮かぶかもって。まあ最終的に殺せなかったわけだけど。それから七年後にいきなり、『出かけるぞ』っていう一言と共に外へ連れ出された。それで連れて行かれたのがセレクトー協会。『合格すれば私を殺すチャンスはいくらでもあるだろう。だが、合格しなければもう二度とチャンスはない。これがお前の最初で最後のチャンスだ』って言われて、試験会場に放り込まれた。時宮を殺したい一心で頑張ったよ。母さんの仇をとるんだって。けどさ、ある時に気付いたんだ。時宮を殺すのは、母さんの仇をとる為、それは確かにそうなんだけど、それはあくまでも半分には思わなかったんだって。俺はさ、いつからか大切なものを守りたいって思ってたんだ。大切な家族、青羽の家族をさ。だって考えてみれば、俺が時宮に着いて行ったのは、奴の言動が小夜たちを殺すという言動に聞こえたからなんだ。もしそれがなければ時宮には着いて行かなかったかもしれない。小夜たちと笑って暮らしていければ、それだけで……」

「そうくん……」

「小夜。先に言っとくけどそれで責任を感じるのはやめてね。それは小夜たちのせいじゃない。俺自身が決めたことなんだから」

小夜は頷いた。こんな簡単にわかってもらえるとは思わないが。

「それに守るなんてのは後付けにすぎないしね」

「そんなことない！」

小夜は首を横に振った。

「後で気付いただけで、それはそうくんがわたしたちのことを守ってくれたってことに変わりはないよ。後付けなんかじゃない」

本気で否定してくれる小夜を見ると、心が苦しくなってくる。あの時は確かにそうだった。けれど今はどうだ。

……間違いなく恨みに突き動かされている。昇格して奴を殺すのだと。

確かに守りたいとは思っていた。守る為に時宮を殺す必要があると。そして時宮を殺すには権力が必要だと、Sクラスになるのだと思った。

矛盾しているではないか。守りたいものを守る為に、守りたいものを犠牲にしようとしているのだ。

「ねえそうくん」

優しい声だった。昔から何度も聞いた、俺の名前を呼ぶ声だ。

「そうくんは大切な家族だよ。だから……」

小夜は昔から、何度も家族だと言ってくれた。自分の父親を取られても、そんな優しいことばかり言っていたのだ。

「……だから、うちに帰ってこない？」

固まってしまう。すぐに、「できない」という答えが出たが、それは声にはならなかった。

俺はそうしたいと思ってしまうのかもしれない。帰って、昔のような生活をするのを望んでいるのかもしれない。

けれど考えるのはやめた。それはもう無理なことなのだ。無理なことを考え、本当の気持ちを知ったところで仕方がないのだ。

「くーにい、もう出て行かないよね？」

追い討ちをかけるように朱音が呟いた。

二人の声が心に響いてくる。小夜の優しい声、朱音の不安そうな声

駄目だ、駄目だと何度も心の中で繰り返す。気付けば自然と首を横に振っていた。

「わたしたち一緒なんだもん」

ぼん、と頭に手を置かれた。

小夜が言う一緒というのは、きっと親がセレクションで死んでいくということだろう。

「きつと分かり合えるよね」

小夜の手が俺の頭を撫でる。

駄目だと思っだし、とても聞いてはいらなかった。

ずっと握りっぱなしだった朱音の手を離し、二人から距離をとる。

「二人は俺なんかと一緒にいちゃいけない」

「え？ どうして？」

強く首を横に振る。

もう全ては手遅れなんだ。だって俺は

「俺はセクターなんだ」

吹っ切り、真っ直ぐと小夜を見据えた。

「……どうということ？」

恐る恐る聞いてきた小夜に伝える。

「人の心を捨てたんだよ」

もうあの頃みたいに 子供の頃みたいにはいかないのだろう。

もしも違う道を選んでいたら、きつと分かり合えたはずだ。だが今の俺はセクターである。常人と考え方の相違があるのも、衝突するのも当然なのだ。

……いけないな。最近よく過去の選択を悔やんでしまう。過去の選択はその時最善であると考えてそうしたものだ。それを否定することは、今の自分を否定することになってしまうというのに。

「10」 現実

翌日はぎくしゃくとした一日になった。学校が休日で、小夜たちがずつと家にいたにも関わらず、会話はほとんどなかった。そんな一日も、もう終わろうとしていた。

小夜たちが寝静まり、居間で一人考え事をしていた。

選択の時はもうすぐそこまでやってきている。ここに来てから三週間が経とうとしているのだ。

セレクターが次に自分の担当する対象者二人を告げられるのは、一ヶ月前、自分の担当するセレクションが終わった翌日である。

一方、セレクションの対象者は違う。セレクションの対象者には、一週間前に参加を促すように手紙が通達されるのだ。

二人のセレクションの知らせも数日中に届くことだろう。その時二人はどんな顔をするだろうか。

決まっている。小夜はあの悲しげな顔をするのだ。そして朱音は泣いてしまうだろう。

酷な現実を目の前にし、二人は逃げ出そうとするかもしれない。しかし俺はそれを止めなくてはならない。止めて、セレクションの当日には二人の目の前に姿を晒すのだ。それは家族としてではない。一人のセレクターとして……。

……何が守るだ。俺は二人を救えていないのに。

唇を強く噛み締めると、口の中に血の味が広がった。自分への怒りから手が震えてくる。

あんなにも懸命に俺のことを思ってくれた。それなのに平然と裏切ろうとしている。

今更俺に何ができようか。この現実を覆す術など、どこに存在しているだろうか。

コンコン、と窓に何かが当たる音が聞こえた。

暗幕を開けてみると、そこには監視がこちらに背を向けて立って

いた。

そういえばなんとか言いながらこいつともそれなりの付き合いになった。でもこいつの方から接触してくるのは初めてだ。

何か重要なことなのだと予感しながら、居間を出て外へ向かった。監視はこちらに見向きもしなかった。それはいつかのように、周りを見回しているのだった。

「御歳宗希。一つ聞きたい」

「あんたが質問なんて珍しい」

そこでやっとこちらを見た。それはセクターらしい鋭い目付きだった。

「今までずっと妙な視線を送っていたのはお前か？」

「いや別に。俺はあんたに興味なんてないさ」

腕を組み、考える仕草を見せた。

こんな風に考えるのも、前に一度同じ仕草を見た。やはり何かがあるのだ。

「そついや前もそんな風に考えてたけど、なんかあったの？」

「誰かに見られているような居心地の悪さを感じていた」

「いつから？」

「監視を始めてからずっとだ」

「ふーん……」

この監視に何か問題があり、それで見張られているのだろうか。

いや、そんなはずはない。そうだとしたら、そんな人間に時宮が監視を任せるとは思えない。

時宮の仕向けた別の監視　小夜たちの監視　の視線を、こい

つが勝手に勘違いしている。それしか考えられない。

「その視線が急になくなったのでな。少し気味が悪くなったただけだ」

「で、俺になんでそんな話を？」

「監視は今日までだ。最後に教えといてやろうと思っただけ」

「そりゃどうも。でも本当はあんたが気になっただけなんでしょ？」

ふん、と鼻で笑った。相変わらず無愛想な奴だ。

「貴様には興味があつたがもう会うこともないだろう。せいぜい達者でやれ」

「あんだこそ。それと慕う相手は選んだほうがいいぜ」

もう一度鼻で笑い、奴は町の闇の中へと消えた。

それを見送り、一人残されたその場所で星空を見上げた。

時宮が何をしようとしているのか。考えが読めない以上、このまま進んで行くしかない。この先に一体何が待ち受けているのだろうか……。

予想していた通り、知らせは数日後に届いた。

二人宛の手紙で、封筒を持つ小夜の横で、朱音がそれを覗き込んでいた。二人は中身がわからないので、「なんだろう、なんだろう」と笑顔で言っていた。

俺は外の封筒を見ただけでそれだと気付き、素知らぬ顔で待っていた。

小夜が封筒を開け、中身を見始める。二人の笑顔はほぼ同時に消えていった。二人が絶望の淵に突き落とされる瞬間を、まざまざと見せ付けられた。

「どうしてっ……!」

小夜は力強く呟くと、中に入っていた紙を握った。くしゃつという音が聞こえ、次にぽたぽたと涙が頬を伝って落ちた。

「よりのもよつて朱音とっ……」

泣いている小夜をよそに、朱音は紙を見たまま固まっていた。まだ口元に微かに笑みが残っていて、ぴくりとも動かなかった。現実を理解していないのか、はたまた理解しようとしていないのか。

「ちよつと見せて」

わざとらしく言い、俺は小夜の手から紙を奪い去った。

朱音はおもちゃを取られた子供のように、声を上げて泣き始めて

しまった。

「くーにい……あたし死にたくないよお……」

泣きながら胸に顔をうずめてきた。

朱音を片手で抱きしめながら、手紙に目を通す。

「そうくん……どうして？ どうしてこんなことになるの……？」

小夜が横に来て腕を掴んでくる。その力は女の子のものとは思えないほどに強かった。

二人は俺を頼っている。セレクターとして頼っているのか、それとも家族として頼っているのかはわからない。だがそのどちらにせよ救えない。方法がないのだ。

自分のあまりの無力さに、叫びたいという衝動を感じた。どうしようもない現実に吼えるのだ。それはまるで負け犬の遠吠えのように。

その激しい気持ちを必死に押さえ込み、平静を装う。

「とりあえずセレクションには参加したほうがいい」

小夜の目に絶望が宿るのが見えた。頼った相手がこんなことを言っただの。当然だろう。

「逃げたら二人とも指名手配されちゃうから。協会から逃げるのなんて無理だし、捕まったらどんなひどいことをされるかわからないだから」

俺は小夜から目を逸らしてしまった。逃げるように手元の紙をもう一度見る。

ごめん。どうしたらいいかわからないんだ。最初は助けられるかもしれないなどと甘いことを考えていた。だが現実やはりそんなに甘くはない。俺はヒーローなんかではないのだ。小夜の言う通り悪者だ。セレクターはみんな、悪者なんだ。

「そっか」

何かを思い付いたように言った小夜は笑顔を浮かべていた。

「セレクターになれば家族も免除されるから、セレクターになればいいんだ」

見ているこちらが痛くなるような、そんな笑顔だった。

錯乱しているのだろう。その目が何を捉えているのかもわからない。

「今からじゃ間に合わないよ。それに小夜じゃ絶対に受からない」

「そんなのやってみないとわからないじゃない！」

焦点がこちらに合った。怒りか恐怖か、小夜の華奢な体が戦慄している。

そんなに簡単な話ではないのだ。酷だが現実を教えてやるしかない。

「肉体試験、知性試験、精神試験。勉強期間も含めて十ヶ月の試験だけど、まず小夜みたいな普通の女の子が肉体試験で受かるとは思えない。運よく肉体試験を超えたとしても先はまだまだ長い」

見るからに弱々しい細い体はまだ震えている。言うべき言葉が出てこないのか、小夜は黙って聞いていた。

「鬼門と言われている、精神試験最後の五日。そこで脱落者が続出するのはなんでかわかる？」

相変わらず反応はない。当然試験の情報など外へ漏れてはいないのだから、わかるはずはないのだが。

「人を殺すんだよ」

わかりやすい言葉で伝えようと、小夜の体がぴくつと跳ねて、震えが止まった。次に口をぱくぱくと動かした。反論をしようとしているのだろうけれど、それは言葉にはならなかった。

「小部屋に入られて、ガラス越しに見える人間を殺すっていう試験。手元のボタンを押すとギロチンがゆっくりと首を切断するんだけど、それを直視しなければいけないんだ。五分以内にボタンを押せなかったり、目を逸らしたり、瞑ったりすれば、それだけで不合格になる」

話していて思い出してしまう。躊躇しなくなっていた自分の異常な精神状態を。

「そして一番の問題は最後の一日。同じような小部屋に入れられる

んだけど、ガラス越しの向こう側が少しだけ違う。共にセレクター試験を受けた仲間の中で、精神試験で不合格になった人間が二人、向こう側にいるんだ。その時はほぼ十ヶ月経っているわけだし、結構仲も良かったよ。でもね、合格するためには殺さないといけないんだ。手元に二つボタンがあつて、泣き叫ぶ二人から一人を選んで生き残らせる方のボタンを押すんだよ。するともう一人の首をギロチンが切断して、それを直視しなきゃいけない。これは前と同じで、五分以内にボタンを押せなかったり、目を逸らしたり、瞑ったりすれば不合格になるんだ」

小夜は両手で顔を覆って大声で泣き始めてしまった。
でもこれが紛れもない現実なのだ。俺もそれを乗り越えてここまでやってきた。

「仲間意識がある中でそんなことをしなきゃいけない。小夜にはできるの？」

答えは返ってこない。ただただ泣き叫ぶだけだった。

「別に小夜が無能だつて言ってるわけじゃない。ただ小夜は優しすぎるから無理だつて話なんだ」

そこまで話すと、胸を思いっきりグーで叩かれた。朱音だった。何度も、何度も叩いてくる。そして最後に顔を上げ、

「おねえちゃんをいじめるくーに inanて……だいつきらいっ！」

強くそう言った。朱音に嫌いなどと言われるのは初めてだった。

「そっか。それは残念」

朱音が俺の元を離れて小夜に抱きつく。二人は抱き合い、そのまま比べるように泣き始めてしまった。

悔しいけれど待つことしかできなかった。慰めることも、助けることも、そのどちらもできない。中途半端なことをすればあらぬ希望を与えてしまう。後で絶望するのに、ここで希望を与えては逆に辛くなるだけだろう。

冷たい口調を意識して二人に告げる。

「ごめんけど俺、今日には本部に戻らないといけないんだ」

そんな俺にも、二人はすぐるような表情を見せた。二人には俺の他に誰もいないのだ。

声には出さないけれど、行かないでほしいという気持ちだけは伝わってきた。でもその気持ちには応えられない。

「さつきも言っただけどとりあえず参加はしないとまずいから……分かった？」

小夜が頷いた。はつきりと頷いたものの、少しの間があつて不安に感じた。

「絶対だからね。当日協会に来るんだよ」

だから念を押してから立ち上がった。

二人を取り残したまま、後ろ髪を引かれる思いでその場を後にしたのだった。

そこからどうしたのかはあまり覚えていない。列車に乗った記憶はあるけれど、切符を買った記憶はなかった。けれど気付けば協会の時宮の部屋の前に立っていた。

……そうだ。戻ってきた報告をしなくてはならないのだ。

ノックをすると返事があつた。ドアを開けて中に入る。

部屋の中では、時宮がいつもみたいに書類の山を相手にしていた。

「ただいま戻りました」

「そうか」

ペンを走らせ、慣れた手付きで書類をまとめていく。

しばらくぼうつとその様子を見ていた。何かを言おうとは思わなかった。いや、言う言葉が見つからなかったのだ。

「……失礼します」

やっとの思いで声を絞り出し、時宮に背を向け、ドアノブに手を掛けた。

「御歳」

体が自然と反応して、時宮の方を見ることになった。理由はわからないが、向こうから声を掛けてくることを期待でもしていたのだ。

ろうか。

時宮は変わらずに机上の紙を見つめていた。

こちらを見ていないので、呼ばれたのが気のせいだとも思った。けれどそんな聞き間違いがあるはずがない。

「先日逃げ出したセレクターは無事確保された」

そうか。あいつは結局捕まってしまったのか。

やはり協会は恐ろしい。一度諦めても最終的には見つけてしまうのだ。

「そうですか」

その返事しかできなかった。

「彼は罰として特別施設へ軟禁をされた。今戻れば許すとチャンスを与えられたが、最後まで無理だと言い続け、免許を返上した」

特別施設は俺も一度入ったことがある。数日飯を与えられず、水だけで生かされる。そして極限状態に陥った数日後に問われるのだ。もう二度と裏切らないと誓うか、それとも免許を返上するのか。免許の返上というのは免許の剥奪と一緒にである。要は処刑されるのだ。ということは彼はもうこの世にはいない。未練があるままあの世へ逝ってしまったのだ。

「人間とは愚かだ。全てを守るなどと神のようなことを考える」
それは彼のことを言っているのか、俺のことを言っているのか。

「何かを守る為には犠牲が必要だ。そうは思わないか？」

今日は随分とお喋りだな、時宮。一体何が言いたいのだ。

小夜たちを守る為に何かを捨てるとのことか？ でも今更昇格を捨てるなどと言っても手遅れだろう。だとしたら一体何を捨てると言っただ。

「……何故俺にそんな話をしたのですか？」

「お前は何も感じないのか？」

同じ境遇の人間のことなのだ、何も感じないわけがない。思うところはたくさんある。

でもあいつはあいつ。俺は俺。やりたいようにやる。ただそれだ

けなのだ。

「それがセレクターとして彼の選んだ道なのでしょう。俺がとやかく言うことではありません」

時宮の表情がぴくりと動いた。

珍しいこともあるものだ。動揺とまではいかないが、あの時宮が反応を示した。俺のどんな言動を予想していたのかはわからないが、どうやらいつもとは違う言動をしてみたらしい。

時宮はそれ以上何も言ってこなかった。

「……失礼します」

言いながら時宮の部屋を後にした。

せめてセレクションまでの一週間は色々と考えておきたい。

今の最善の行動。それは休むこと。そして明日に繋げることだ。

明日になれば今日よりは冷静になる。明後日になれば、明日より冷静になれる。そうやって冷静に、冷静に考えるのだ。何をどんな風に考えるのかは今からではわからない。そしてわからないことを考え続けても無駄に疲れるだけだ。

休もう。一週間後はセレクションなのだ。傷付くことはわかっているが、それでもどちらかを選ばなければならない。

「11」 セレクション

一週間後、協会内のある場所に来ていた。その場所とは、裁判所を模して造った部屋、セレクションが行われる部屋である。

裁判官席に当たる中央の椅子には時宮が座り、検事席に当たる場所には俺が立っていた。そして今からやってくる小夜と朱音は、陳述台に当たる場所へ立つこととなる。

嫌な静けさの中で時間だけが経っていく。

一ヶ月振りに羽織ったコートは冷たく、重みもあった。そして普段隠すようにしているバッジは、今日は室内の明かりに反射して輝いている。

バッジの付いた胸に手を当てると気が引き締まった。これを付けている今は笑うことすらも許されないのだ。

沈黙を破ったのは、扉の開く音だった。それは青羽姉妹がやってきた音だった。

最初二人は深刻そうな顔で入ってきた。でも俺の顔を見た途端、驚いたような顔をした。

寝耳に水なのだ。驚くのも無理はない。

俺がいることで安心したのか、先程より明るい表情でこちらへと歩いてくる。

しかし俺は、そんな二人に冷たく言葉を浴びせなければならない。「こんにちは。わたくしは本日あなたたちのセレクションを担当する御歳宗希と申します」

今の俺の立場はセクターであり、小夜たちの知っている御歳宗希ではない。それを知らせる為の言葉でもあった。

「えっ……。そうくん……？」

まるで他人であるかのような挨拶に、小夜は足を止めてしまった。「どうぞ。お進みください」

手で示すと、その場所へゆっくりと二人が歩いてくる。

小夜は少し俯きながら歩き、それを見た朱音が、心配そうに小夜の手を握った。小夜の顔を覗き込み、そしてこちらを睨んできたのだった。

それでいい。今の俺たちはこういう関係であるべきなのだ。

二人が所定の位置に着くのを確認してから、時宮の方を見た。

「では始めさせていただきます」

時宮が頷くのを確認し、次に目を瞑った。

蘇ってくる。この一ヶ月間、青羽家で過ごした日々が。

「わたくしはこのセレクションの為、二人への接触を試みました」
目を開き、始まりの言葉を口にする。

「今から申し上げることは全て真実で、そして公平に判断した結果だということをここに責任を持って宣言いたします」

小夜からさっきの弱々しい態度はなくなっていた。顔を上げてじつとこちらを見ている。特にこれといった感情は感じられない。

朱音は上目遣いで睨むようにこちらを見ていた。

「まず第一に」

あらかじめまとめておいた書類を持ち上げ、それに目を通す。

様々な日常の出来事を思い出し、細かく伝えていく。それはほとんどが朱音に問題があるというものばかりだった。

聞いている側は薄々勘付いているだろう。このセレクションの結果が最終的にどうなるのか。

やがて書類にまとめた全てを喋り終えた。紙を机に二度叩きつけ、揃えてそこへ置いた。二人の方を見て、最後の言葉を口にする。

「そして家事は全て、青羽小夜が行っているのをわたくしは見続けてきました。一方の青羽朱音はまだ自立できていないただの子供。彼女の手伝いをする事もなく、毎日をただ呆然と生きているだけの人間でした」

自分の言っている言葉で心が痛んだ。どうしてこんなに痛いのか、考える余裕はなかった。今はセレクション中なのだ。

「以上のことを踏めまして、わたくし御歳宗希は、青羽小夜を選択

いたします」

「クーにい……」

朱音の目から光が消える。睨む元氣も失ったらしく、俯いて口を押さえた。

「ま、待つて！ 選ぶんなら朱音を選んでよ！」

小夜が食って掛かってきた。その表情からは焦りが見られた。こうなるんじゃないかと憂慮していたが、全くその通りになってしまった。

小夜は朱音とこちらを交互に見て、最後にこちらを見て止まった。そんな小夜を冷たい目で見やる。

「私はセレクターです。あなたはそれを理解した上で発言をしているのですか？」

小夜はまた何かを言おうとした。でもそれをやめ、結局俯いて喋らなくなってしまった。

目の前に俯く二人を残し、全ては終結した。

「以上です。時宮先生」

時宮を見ると、奴は椅子に仰け反っていた。

その態度は、とても人の命を左右する場面に出くわしているとは思えない。ただ退屈そうに、まるでテレビでも見ているかのようだった。

「そうか」

口から出たのは、ただその一言だけだった。

「ひどい……こんなのひどいよそうくん！」

諦めたと思っていた小夜が再び牙を剥く。唇を震わせながら、こちらを敵意の籠もった目で見た。

大人しくさせなければ時宮の機嫌を損ねることになる。

「黙りなさい」

それは本気で脅すつもりで言った。今までの経験を生かし、怖気づかせる目で睨んだつもりだった。

でも小夜は目を逸らさない。強い光の宿った目でこちらを見続け

ていた。

「黙らないよ！ どうして、どうしてこんなっ！」

怖くて、下手したら自分の命だって危ういのに、人の為にこんな目をしているのだ。どうしてそんな目ができるのか俺には理解できない。

脅すのは無理だし、こちらが何かを喋ると必ず言い返してくる。

最善なのは無視することだと思った。話を進める為に再び時宮の方を見る。

「時宮先生」

「なんだ」

仰け反っている時宮がこちらを見下ろす。良からぬことを口にしないかと思っているのだろう。

だが安心するといい。俺はただ忠実に仕事をこなす弟子にすぎないのだ。

「これは昇格試験を兼ねているのですよね？」

「それがどうかしたのか」

「Sクラスになれば刑執行も自分で行わなければなりません。そしてもしこの試験に合格すれば」

「御歳、回りくどいぞ」

そうだな。全てを言わなくとも理解してくれるだろう。

「申し訳ありません。では単刀直入に……残りの仕事を全て私に預けてください」

時宮は口を噤んだ。

追い討ちをかけるように喋り続ける。

「このままではセクターとしてのわたくしの面目が丸潰れです。青羽小夜への反逆に対する刑、それから選ばれなかった青羽朱音への刑の執行も、全てわたくしに任せていただだけませんか？」

「できるのか？」

「安心してください。わたくしの精神試験の結果は満点です。躊躇がないと指導教官にも褒められたほんです」

時宮は満足そうに、微かに笑みを浮かべた。

「そうか。いいだろう」

「ありがとうございます」

頭を下げ、視線を二人の方へ向ける。

「いくぞ」

短く言い、部屋を後にした。

「12」 真実

天気は悪かった。今にも雨が降りだしそんな雲が空に広がっている。

雨は嫌いだ。急ぐとしよう。

協会の外には黒い高級車が停まっていた。昔俺を施設まで送ったのと同じ車だ。刑執行はここから少し離れた施設で行うので、そこまではこの車で移動となる。

車の横にはスーツを着た男が立っていた。協会の職員である男だ。「時宮先生から連絡は受けております」

こちらの顔を見た男は丁寧な口調でそう言っ、内ポケットから車の鍵を取り出した。

「ども」

それを受け取り、二人に車に乗るように指示を出す。二人は大人しくそれに従った。

「しかしさすが時宮先生のお弟子さんです。その若さで刑執行まで任せられるなんて」

乗り込もうとすると、嬉しそうにそんなことを言ってきた。今から媚を売っておこうという魂胆なのだろう。

「いえそんなことは……急ぎますのでこれで」

それを軽くあしらひ、車に乗り込んだ。

その車は随分と乗り心地が良かった。こんな車は今まで運転したことがない。

しかし、こんな簡単にことが運ぶとは思ってもいなかった。だからこそ不安に思ってしまう。

体を捻り、シートベルトを引っ張って装着した。次にシートを合わせ、最後にミラーを合わせ

……なるほどな、そういう事か。

エンジンを掛け、ゆっくりと車を発進させる。運転はかなり久し

ぶりだが、心配はなさそうだった。

「お前も馬鹿な奴だ。逆らわなければ助かった命を」
鼻で笑ってやる。

「嘘だよなそうくん？」

小夜の声は微かに震えていた。言葉でそう言っているものの、現実かもしれないという不安が垣間見える。

ルームミラー越しに見てみると、小夜もミラーをじっと見つめていた。

その横では朱音が泣きじゃくっている。さつきからずっとこの調子だった。

「お前はうるさいんだよ。泣くなら静かに泣け」

朱音は口を押さえた。漏れないように、必死に声を押し殺しながら泣いている。

「まあせいぜい人生最後のドライブを満喫する事だな」

小夜は朱音を抱き締め、全身をがたと震わせていた。

死を間近に待つ人間は、震えるか、抵抗するかだ。そんな人間を数多く見てきたが、後者の人間はいまだにたった一人しか見たことがない。

赤信号で停まってぼうつと外を眺める。まだ午前中にも関わらず、車通りも、人通りもそれなりにあった。ここにいる人間たちはみんな働いていないのだろうか。そんなくだらないことを考える。

信号が青に変わるのと同時に車を再発進させた。

車の中は、暖房を効かせていないせいで空気が冷たかった。しかしそれはあえて付けていないのであった。暖かくなると自然と頭がぼうつとしてきてしまう。そうなると困るのだ。

ルームミラーで二人の様子を確認する。

何度確認しても、二人はひどく震えていた。同じ道を通っても気付かないほどに、怯えているのだ。

どれくらい走ったのか。同じ道を何度も何度も回り、結局町外れへとやってきた。そこに着いた頃には雨が降り始めていた。空は暗

く、地上が影に包まれている。

「嫌な空だな」

空を見上げながらそんなことを呟く。それはいつかを思い出させる空だった。

二人を降ろそうと車のドアを開ける。

「とつとと降りろ！」

叫びながら運転席の扉を蹴ると、二人は恐る恐るといった様子で降りてきた。

二人は怒鳴られるを嫌ってか、降りた後は指示せずとも目の前に並んだ。その場所から微動だにせず、雨に打たれながら二人でくつついて震えていた。

「付いて来い」

車から離れ、脇の細い道へ入っていく。

何一つとして変わっていない。あの時のままだった。

木に囲まれた道を歩き、その先にある場所を指す。そこまで行けば一旦落ち着けるのだ。だがその前に、一つだけやるべきことがある。

しばらく無言で歩き、足を止めて二人の方を振り返った。

ここまで来ればさすがにもう大丈夫だろう。

「ここから少し歩けば小屋があるから。とりあえずそこに行こつか」
小夜は涙目で、ぼかんとした表情でこちらを見た。あ、あ、という口の動きはあったが、それは声にはならなかった。

その様子を見てどうしていいかわからず、笑いながら頭を掻いた。

「あの車には盗聴器があつてね。下手な事は言えなかったんだ」

「えっ、それじゃあさっきのは……？」

「演技に決まつてる」

小夜は胸を押さえ、はあと大きく息を吐いた。

朱音はその場にへたり込んでしまい、それから大声で泣き始めた。全ての不安がなくなったのだろう。

「ひどい！ ひどいよくーにい！ ほんとうに、ほんとうに怖かつ

「たんだからあああつ！」

「ごめんごめん」

初めから傷付くことはわかっていた。それでもどちらかを選ばなければならぬことも。だが刑執行をするかどうかはまた別の話だ。予定とは少し違う形になってしまったけれど、なんとかここまでは来ることができた。車の中でもっと逃げるのに最適な場所があるかもと考えたが、結局思い当たらずここに決めたのだった。

「でも時宮もさすがだよ。俺の事ならなんでもお見通しと言わんばかりだ」

だが俺もあんたのことをよく知っている。弟子の俺ですら信じない、そんなことは分かりきっていたこと。簡単に任せると言ったからには、絶対に何かあるのだろうと思っていた。

「とりあえず急ごう」

俺はセレクションまでの最後の一週間で、昇格も、守ることも両立する計画を考えていた。刑執行を請け負い、二人を安全な場所へ送り届ける。とりあえずここまででは順調だ。だがまだ計画は始まったばかり。問題はこれからなのだ。

正直に言つと、ここから先のことはほとんど考えていない。時宮の動きの見通しがつかず、なるようにしかないと考えていたのだった。

さて、どうするか

「そうくん。ごめんね」

考えようとした時、そんな風に謝ってきた。何を謝っているのか聞いてみると、

「わたしそうくんを疑ってた。わたしたちを助けようって思ってたのに」

と言ってきた。

「何言つてんだよ」

本当に小夜は馬鹿だよ。そんなのは謝ることじゃない。

「俺は今まで小夜たちに散々迷惑を掛けっぱなしだった。これくら

いの恩返しはさせてよ」

「恩返しなんてそんなっ……わたしたちだって色々迷惑を掛けてるのに」

小夜たちが一体どんな迷惑を掛けたって言うんだ。そんなものは一度たりとも掛けられた覚えはない。小夜たちには助けられてばかりなのだ。昔から今まで、数え切れないほどに。

二人がいなければ、俺はここに存在していなかったかもしれない。「あれ？ それって……」

小夜が何かに気付き、俺の前に回りこんできた。首筋に手を当てられる。

「これ！ わたしたちが買ったネックレス！」

「あーいかん。見えないように付けてたのに」

もう一度服を整えて隠す。こんな物を付けているのがばれたら、時宮になんて言われるかわからない。

「良かった……。あまり喜んでもらえてないから心配だったけど、付けてくれたんだね……」

セレクターとしての立場を忘れない為にバッジを付ける。これはそれと同じことだ。小夜たちの家族であることを忘れない為に、今日は付けておきたかったのだ。

「早く行こう。このままじゃみんなびしょびしょになって風邪引いちゃう」

雨は止まない。それどころか勢いを強めているようにも感じられた。

二人は息を切らしている。二人とも運動は苦手なのだ。

だが目的地はもうすぐそこ。奥に見えてきたのは、俺が以前時宮に連れてこられた小屋だった。

ここなら人は来ない。七年ここで暮らして一度も人が来なかったのだ。間違いはない。

小屋が段々と近付いてくる。あそこに着けば休める。あともう少しで

雨の音の中に、砂利を踏みしめる音を聞いた。

現れた大きな影が、あの日の景色と重なった。雨の降る晩、俺を脅迫したあの影に

「こんな所で何をしている？ 我が弟子よ」

嫌な汗が全身から噴き出すのを感じた。その緊張感とは裏腹に、口元には自然と笑みを浮かべてしまう。

「これはこれは時宮先生。こんな辺鄙な場所でお会いすることになるとは……」

この男はいつもそうだ。予想外の事を、さも当然のことかのようにやってのける。

「説明してもらおうか」

時宮が歩いてきて、目の前に立った。

早く説明をしなければ。そう思えば思うほど力んでしまう。握った拳の中はじつとりとっていた。

「いやあ、実に殺すには惜しい姉妹だったもので、殺す前に楽しませてもらうかと」

「説明してもらおうか」

懷から取り出した銃を額に押し付けてくる。「冗談はもういらぬということだろう。」

雨のせいで、頭から足の裏まですっかりべたべたになってしまった。汗か雨かわからない水滴が目に入ってくる。

「答えがわかつている質問に答えさせてどうするつもりですか？」

恐怖の中に僅かに残る反抗心だった。しかし時宮は表情一つ変えない。

押し付けていた銃を下ろし、こちらをあの目付きで見下ろした。

「無能者はこの世界にはいない。忘れたわけではあるまい？」

頷くと、

「ならば言わずともわかるだろう。お前の運命が」

そう言って時宮はポケットから携帯電話を取り出した。

雨に濡れて携帯電話が壊れる。そんなことは考えてはいない。

時宮源太にとってはどんな道具だろうと全て使い捨てるもの。使うまで使い、使えなくなったらすぐに処分するのだ。

「今ここでお前に対する刑罰を執行する」

時宮が携帯電話を操作し、耳に当てた。

電話？ 一体誰に……。

「命令だ。今すぐ来い」

一方的にそれだけ言い、奴は電話を切った。その後小夜たちの方を見た。

「青羽姉妹よく見ておけ。弱者が守りたい者を守れずに朽ち果てていく様を」

「や、やめてっ!」

駄目だ。ここで小夜たちが余計な事を言えば二人だって……。

「いいんだ小夜! これは小夜や朱音のせいじゃない! 俺が勝手にやったことだ!」

「よくないよっ!」

「っ!」

時宮が髪を掴んできた。抗いようのない強い力だった。

「御歳、誰が喋っていいと言ったのだ?」

「くっ……!」

くそ、これじゃどうしようもない。それに奴は誰かを呼んだ。このままじゃ更に分が悪くなってしまう。

「お待たせしました」

その声と同時に姿を現したのは、一ヶ月前に俺に挨拶をしてきた草加だった。

「紹介しよう。私の新しい弟子の草加だ」

わざとらしい言い回しだ。俺はもう弟子じゃないと言いたいわけだな。

「草加。こいつは裏切り者だ。今ここで始末しろ」

「了解しました」

時宮は髪を掴んでいた手を離し、俺から距離をとった。

草加が懷から銃を取り出しながら近付いてくる。

「御歳さん。あなたにはがっかりです」

たった一ヶ月で偉くなつたもんだ。完全にこちらを馬鹿にしている。

さっきの時宮と同じく、額に銃を押し付けてきた。

こちらにも銃を取り出せばいい。だが怪しい動きを見せればすぐに撃たれるだろう。それに運良く取り出せたところで、二人を相手に立ち回るのは無理だ。

最善だ。最速で最善を考えるのだ。

「何か言い残したいことはありませんか？」

「困つたな。いっぱいありすぎて言い切れないや」

「そうですか」

草加は嘲笑した。聞く気など毛頭なかったのだろう。

こいつはセレクターに成り立てだ。負ける気はしない。自分の銃を取り出すくらいならこいつから奪い　いや、やはり駄目だ。どちらにせよ時宮にやられる。

草加から銃を奪い去ったところで、咄嗟に時宮へ照準を合わせるのは不可能だ。時宮との距離が近ければ、銃を奪った後に時宮へそれを押し付けて、動きを封じることくらいはできただろうが。

……さすがだよあんたは。反抗した時すぐさま肉弾戦に持ち込まれないよう、そうやって距離をとつたのだな。

「さようなら」

一発の銃声が耳をつんざく。痛みはない。死ぬ時はこんなもんか

泥水の弾ける音が聞こえた。誰かが地面に倒れこんだ音だ。

でもそれは少し離れた場所から聞こえてきた。

「ひっ、ひい！」

草加は奇声を発しながら銃を捨てた。そして目の前から走り去っ

て行く。

「お、おい！」

何が起きたのか理解できない。頭を整理してみる。

銃声が聞こえて、倒れる音が　まさか！

小夜と朱音の方を見る。だが二人はさっきと同じ場所に立っていた。口を開き、一部を見たまま動かない。その視線を追っていった先、そこには時宮が倒れていた。

「えっ」

何故？　何故時宮が倒れている？

考えているとまた銃声が聞こえた。今度は二発。

「あっ……がつ……」

逃げようとした草加が倒れた。泥水の中に横たわり、足を押さえながらぶるぶると震えている。

そこに一つの足音が近付いてきた。

「一人だけ逃げようなんて考えちゃいかんだろー。お仕置きだなー」

「あんたっ……！」

俺が口を開きかけた時、草加は腕を踏まれ、そこにもう二発弾丸を打ち込まれた。

「ぐうああああああああああああっ！」

叫び、体を捻り、必死に逃げようとする。が、ほとんど動いていない。両足をやられ、片腕までやられたのだ。

弾が切れ、銃に装弾される。その一連の光景に見入ってしまった。いた。

このままではまずい。

「小夜！　朱音！　目を閉じて耳を塞いで！」

二人は最初どうしていいかわからない様子だったが、なんとか言う通りにしてくれた。

こんな光景を二人に見せるわけにはいかない。

「おーおー優しいねえ」

こちらに顔だけを向けてそんなことを言い放ち、直後に草加の腹

を踏みつけた。

「どつちがいい？ ここと、ここ」

心臓か、頭かと問う。

「あ……ああ……。や……やめてく」

三発の銃声が草加の言葉を遮った。

草加はそれ以上喋らなかつた。それどころかぴくりとも動かなくなつてしまつた。

「そんなこと聞いてないつての。……あーあ、もう壊れちつたよ」

泥水と血が混じり、禍々しい色へと変わっている。

「ようよう時宮せんせー。あんたはもう用済みだぜ」

今度は時宮へと近寄つていた。その笑みは前よりも不快に感じる。

「ふん、やはり現れたか」

俺だけでなく、時宮も知っているようだった。

野球帽を被つた、サングラスの男。何故こいつが時宮を撃ち、草

加を殺した？

……理解できない。なんなんだこいつは。

「ずっと御歳の監視をしていたようだな」

俺の監視？ あの女が感じていた視線と関係があるのか？

「かんしい？ 人聞きが悪い事を言うなあ。俺はただ息子を見守つていただけだろ？」

「……え？」

今、息子つて……。

震える。声が、全身が、心が、全てが震えるのを感じた。

「御歳憲治。みとせけんじ何故今になつて現れた」

男がサングラスをはずし、帽子を脱ぎ捨てる。

間違いない。この男は

「なぜえ？ 痛手を負わせてくれたあんたにお礼をする為に決まつてるだろ？」

「ふん、嘘だな」

傷のある片目を瞑つたまま、例の不快な笑みを浮かべる。

なんなんだ。意味が分からない。なにを言っただこいつらは…。

「おう宗希、でかくなったな。状況が理解できないようだが大丈夫か？」

近付いてくる。

「逃げる御歳」

「えっ……？」

こちらに足を向けていた男がぴたりと足を止める。そして時宮の方へと方向転換をした。時宮の傍まで来ると、すぐに足を振り上げた。

「っ！」

蹴られた時宮の傍の水溜りが色を変える。

なんだこれは。逃げろだって？　なんであんたがそんなことを言うんだ。

「おいおい笑わせんなよ。いつまでもせんせー気取られたら困るぜ。協会の犬が……よっ！」

「ぐっ！」

もう一度蹴られた時宮が悶える。

時宮の血の出所はわからないが、恐らく撃たれた場所は腹部の辺りだ。こいつはわざとそこばかり狙っているのだ。

「まあいいや。今日は気分がいいからもう許してやるよ」

そう言いながら両手を広げ、

「嗚呼、なんて清々しいのだろうか」

わざとらしい口調で続け、

「今すぐここで、俺に必要なものの全てを清算できるんだからなあ」

心底嬉しそうに笑ったのだった。

「そ野郎」

沸々と怒りがわいてくる。復讐すべき相手がここにもう一人。走った。時宮の横に立つそいつの後姿へ向かって

奴はこちらを一瞥し、嫌な笑みを浮かべた。それを見た次の瞬間、腹部への強烈な痛みを感じた。

「がっ……！」

予想外の回し蹴りが腹部にめり込んだ。耐えようとするが、どうしようもない痛みとその場に蹲る。

こんな奴、倒せないはずがない。それなのに……なんでっ！
「おい宗希」

さっきまでの口調とは違い、それは昔の暴力を思い出させるような暗い声だった。

「お前随分偉くなっただじゃねえか」

顎の辺りを持たれて顔を上げさせられる。その後に軽く頬を叩かれた。

「誰の許しを得てセレクター試験なんて受けたんだ？ ああ？」

ばしばしと繰り返し叩かれる。腹部の痛みが消えるまでこの屈辱に耐えるしかない。

そこでいきなり、奴は髪を掴んできた。思いっきり振り下ろされ、汚い泥水へ顔を付けられた。

「おい！ 誰の許しを得て普通の生活送ってたんだ！？」

矛先が変わった。結局こいつは俺のこと全てが許せないのだ。
「楽しそうだったよなああああああ！」

やはり、ただのくそ野郎だ。

「父親の俺がこの傷で苦しんでいるというのにお前はあああああ
っ！」

泥水に顔を押し付けられるが、それには動じない。

前とは違う。あんたに暴力を振るわれ、泣いていたあの頃とは違うのだ。

黙っていると、舌打ちをして髪から手を離れた。

「ああそうそう。お前がまだ人間を捨てていないという話を聞いて父ちゃん年甲斐もなくはいじゃったよ」

口調が穏やかなものへと戻った。不気味な急転換。

見上げると、にたにたと笑いながらこちらを見下ろしていた。

「なあ宗希」

奴の顔が満面の笑みに変わる。

「あの嬢ちゃんたちを殺したらどんな声で泣いてくれるんだ？」

背筋が寒くなった。

さつき目を閉じるように言ったが、二人はすでに顔を上げていた。震える朱音を小夜が抱き締めている。

そんな二人に銃口が向けられた。

「やつ、やめろっ！」

咄嗟に叫んだ時、昇格などどうでもよいと考えている自分に気付いた。

どうしてだ。二つを得ると決めたのに、どうして守ることだけを考えているのだ

「そうかそうか。自分は何をされてもいいくせに、この嬢ちゃんたちに手を出されるのは嫌なわけかあ。いやあ愉快愉快」

満足そうな笑みだった。感情を露にしたのが面白くて仕方がないのだろう。

「な、なあ。あんたが恨んでんのは俺なんだろ？ 小夜たちは関係ないじゃないか」

どうして俺は本来の目標を捨てようとしている？

「おいおい動揺が声に表れちゃってんぞ。それでも一端のセレクトかあ？」

かっかっか、と笑い、小夜と朱音の方へ銃を向けた。

「ばーん！」

体がびくんとしてしまう。

ただの撃つ振りだ。遊ばれている。

「はっはっは！ これはおかしい！ 調べさせた甲斐があったなあ！」

「愚かだな。御歳憲治」

時宮の声だった。体を起こし、今まで一度も見ることがない弱っ

た顔をしている。

「ああ？」

「愚かだと言ったんだ。貴様は自分一人では何もできない愚か者だ」
「いきなりなんだあ？」

時宮は反応しない。顔に痛みが出ているような状況で奴を挑発しているのだ。

「はあ、がっかりだよ。まだそんなこと言う元気があったなんて……」

時宮に近付き、足を振り上げる。

「なあ！」

しつこいくらいに腹部を蹴る。血の水溜りができたところで、時宮を俺の横まで吹き飛ばしてきた。

あの時宮が倒れている。あの恐ろしいほどまでに強い時宮が、こんなにも苦しそうな顔で……。

「おい嬢ちゃんたち。お前らも宗希の横に並べや」

朱音は泣いているが、小夜は奴を睨んでいた。

「はよしroyあ！」

奴が叫ぶと、小夜は朱音の体を支えながらこちらまで歩いてきた。賢明だ。今逆らうのは最善ではない。

小夜は泣きじゃくる朱音を慰めながら、じっと奴のことを睨んでいる。

「おーおー。姉ちゃんはいいい目付きするねえ」

気持ちの悪い笑顔で、奴は少し離れた場所を左右に歩いている。

雨音と、砂利の音だけが耳に入ってくる。

何往復かした後足止め、砂利の音も同時になくなった。

「よし、今からおっちゃんが順番に殺してやるからなあ。誰からがいい？」

ふざけたことを言い始めた。この現状をゲームかなにかと思い、楽しんでいるのだ。

何も答えないでいると、奴は銃口を朱音に向けた。

「じゃあかわいい君からにしようかな。弱虫なのは見てるだけであつくだよ。宗希を見てるみたいでなあ」

朱音が標的にされた。

どうするか考える前に小夜が一步前に出た。自分だって怖いはずなのに朱音を庇っているのだ。

「姉ちゃんさつきから気に食わんなあ。まあいいや。先に死にたいみたいだからそうしようかね」

銃を構える。本気で撃つ気だと感じた。

そうなのか。今更になってわかった。ずっと迷いがあつたのは、その選択が間違っていたからだ。前に小夜たちの身に危険があつた時に苛立ちを感じたのは、無理矢理気持ちをこまかそうとしていたからだ。時宮に縛られ、昇格を優先しようとした。あれは無理矢理決めた結果にすぎなかったのだ。

全ての雲は晴れた。俺は！

小夜の前に出て、奴を真っ直ぐ見据える。

もう逃げはしない。ごまかしもしないし、忘れもしない。

「そうくんっ！」

奴は楽しみに笑った。

「泣き虫宗希が女の為に？信じられんなあ。父ちゃんその成長が嬉しいよ」

その後、手を目に当ててわざとらしい泣き真似をした。それをやめて手をどけると、冷やかな目でこちらを見下ろしていた。

「その勇氣に免じて先に逝かせてやろう」

銃口が俺の頭を捉える。

こんなところでは終われない。急いで最善を考えるのだ。

「ちよつと待った。先に一つ約束してくれないかな？息子の最後の願いつてやつ」

取り押さえるか？

「ん？なんだあ？内容によるなあ」

いや、距離的に無理だ。現実的ではない。

「小夜たちには手を出さなくてもらえないかな」
 楽しそうな表情が一瞬にして消えた。

時宮が庇った？　何故？　意味がわからない。弟子なんてそんなのは関係ない。庇う理由なんてないはずだ。時宮は敵、ずっと敵でいなければいけない。目標で、仇で、人生最大で最悪の敵で「うあああああああああああああああああああつ！」

砂利に人間が倒れる音を最後に、そこには雨音だけが残された。雨はずっと続いていた。でも嫌なはずの雨が、嫌とは感じなくなっていた。

「何がだよ……」

時宮は仰向けに倒れ、雨空を見上げていた。

どうして俺はこんな気持ちになっている？ おかしいだろ、こんなもの。こいつは親の仇で、ずっと恨んでて、敵なのだ。

「わざわざ言わないと分からないのか？」

「だが安心しろ。今回のセレクションの終了処理はしてある。協会の書類上、青羽朱音は死に、青羽小夜はセレクションに選ばれた。

時宮が咳をすると、口元から血が流れ出た。

小夜が時宮に近寄ろうとすると、時宮はそれを手で制した。

「少し、昔のことを話しておこう」

穏やかな語り口だった。こんな声を時宮は出せるのだ。

「お前の母親のことだ」

「えっ？」

「お前の母親は本当に強い人だった」

それは母親のことを知っているような口振りだった。

案の定、時宮は母の昔の話をした。俺の知らない、遠い昔の話だ。
「そんな彼女が日々の暴力のせいで疲れ果て、いつも、『死にたい、死にたい』と漏らしていたんだ。だがお前がいたからこそ、彼女はぎりぎりの状態で生きていた。しかしセレクションに召集され、もう限界だったのだろう。『宗希を守ってあげられないのなら、いつそのこと一緒に死にたい』と、彼女はそんなことを言ったのだ」

知らなかったことがどんどんと語られていく。

母がそこまで思い悩んでいたなんて思いもしていなかった。あんな風に笑いかけてくれていたのに。

「私はそんな彼女を見ているのが辛かった。そこで私はセレクターであることを利用し、彼女に死をプレゼントしたのだ」

時宮が目を細める。

「それが正しいとは思わない。だが少なくとも私にはそれしか思い浮かばなかった」

仕方ないと思ってしまう。時宮なりに最善の選択をしたのだ。

もし俺が同じ立場だったら、とても同じことはできなかっただろう。そうなれば、母はもっと苦しむことになっていたかもしれない。「そこで終わればよかったのだ。だが私はどうしても憲治が許せなかった。だから人道に反することを承知で憲治を殺そうとした。しかし私は結局奴を殺し損ねてしまった」

「じゃあどうして殺したなんて言っただよよ！」

時宮は一度、大きく息を吐いた。

「……不安は邪魔になる」

……不器用すぎだ。あんたは奴に愚かだと言ったけれど、あんたもよっぽど愚かだよ。

「お前には強くなってもらわなければならなかった。だからそうしたほうが懸命だと考えただけだ」

時宮はそこまで話して何も言わなくなった。話はもう終わったのだろう。

雨音に氣をとられ、空を見上げてみる。

止む気配のない雨が降り注いでいた。それはまるで、空が泣いているかのように。

「『あなたの力で、人生の理不尽に負けなくらい強い子に育ててください』」

空を見上げていると、突如時宮がそんなことを呟いた。言葉が理解できない。

「お前の母の遺言だ」

それを聞いた瞬間、全てが繋がった。今までの時宮の行動が、台詞が

「御歳、お前はまだ弱い。母親みたいに強くなり、この世界を生き抜いてみせろ」

時宮の命の灯火が、空の涙によって弱々しくなっていく。

「そしていつかお前が守れる力を持った時、そのいつかには、幸せな家庭を……彼女の成し得なかった事を……」

時宮の体から力が抜けた。

『もしこれから先、大切なものを失いたくないというのなら私に付いて来い』

その時宮の言葉が蘇る。全ての始まりになったあの言葉。俺は深読みし、「付いてこなければ今のお前の家族を殺す」ということを言っているのだと思っていた。でもそれは全くの間違いだった。その言葉に裏なんてなく、ただ単に俺を強くする為だけに

……馬鹿じゃないのか、あんたは。理解できるわけがないだろうが、そんなこと。それにいつもやりすぎなんだ。本当に馬鹿野郎だ

っ！

「くそっ！」

地面を強く殴る。砂利のせいで手からはひどく血が出た。だがそんなことはどうでもよかった。今はとにかく、自分の愚かさが見えなかった。

二人を家に送り、本部へと戻ってきていた。

その日、時宮が死んだという情報が協会内に広がった。そしてもう一つ、噂のSSクラスも死んだのだという話も広がった。

初め聞いた時、その内容が理解できなかった。時宮が死に、SSクラスの間も死んだ。二人は同一人物なのに、どうしてそんな扱いをするのか。

その答えは簡単だった。SSクラスは時宮ではなく別の人間だったのだ。

SSクラスの名は 御歳憲治。あの男は俺の苦しむ顔見たさにこのセレクションを仕組んだのだ。

そしてきつと、時宮は全てを知っていたのだろう。あの男がセレクターになった事も、SSクラスになった事も、今回のセレクションの事も

「御歳くん。話は聞きました」

廊下を歩いていると、冴木が話しかけてきた。

「あの人の最期はどんな風でしたか？」

どんな風って、大体想像できるだろう。

「あの人は最後まで自分を貫きましたよ」

まったく参るよ。まるで自分があのセレクションを仕組んだかのように言っておきながら、本当は違うんだからな。

「それはどういうことですか？」

「最期まで意地悪な師匠だったってことです」

冴木は首を傾げた。

時宮、あんたは俺も気付いていると思っていたのか？ だとしたら買いかぶりすぎだ。今の俺はあんたほど優秀じゃないんだ。

窓から外を見る。外ではまだ雨が降り続いていた。

自分にどこまでの力があるかは分からない。それでもきつと守ってみせる。

そして暗雲の広がる空を見上げ、尊敬すべき師匠へ誓った。

俺はきつとあんたを越えるよ。犠牲なんてなしに、全てを守ってやる

「13」 春

昇格の知らせは、新たな季節と共に到来した。それをいち早く伝えたくて、青羽家を訪れていた。

「そうくん頑張ったね。偉い偉い」

頭を撫でられる。お姉さんぶるのはいい加減やめてほしいのだけれど。

「どうも」

すっかり寒さは消え、庭には陽が差し込んでいた。

最初はすぐに帰るつもりだったがそんな気は失せた。だってこんなにも天気がいいのだ。

「よいしょつと」

わざとらしく言いながらその場に座る。

同じように、すぐ横に小夜が座った。

「あったかいねえ」

日向ぼっこ。こんな風にするのは子供の頃以来だ。

「朱音は？」

「まだ寝てるー」

朱音らしい。何かなければ休日は昼くらいまで起きてこないだろう。

ふと笑ってしまった。

気持ちちは穏やかで、そしてこんなにも自然に笑顔になる。

「なに笑ってるのよー？」

「なんかいいなってさ」

これからはちよくちよく帰ることにしよう。やはり家族とはたまには顔を合わせなくてはいけない。

そのまましばらく二人で陽を浴びていた。必要としていたのはこんな時間なのだ。

「わたし、ずっと考えてたんだあ」

ぼうつとしていると、小夜はいきなりそんなことを言った。

「ん？なにを？」

「そうくんが青羽宗希になる方法」

その言葉に戸惑ってしまふ。

「小夜、もうその話は」

「わたしいいこと思い付いたの。どうしてこんなに簡単なことに気が付かなかったんだろうね」

俺の言葉など聞いちゃいない。こういう時の小夜は大抵変なことを言い始める。

「……選んで」

「はい？」

聞き返すと、小夜はむっとした顔をした。

「わたしか朱音を選んでって言うてるの。それで結婚すればそうくんも晴れて青羽宗希になれるでしょ？」

「待て待て。色々おかしいって」

「うるさい！いいから選びなさい！」

小夜は顔を真っ赤にして叫んだ。その顔を見ていると気持ちが焦る。

駄目だ、落ち着くんだ。最善の選択を
だが考えても全く分からなかった。

「……あのさ、青羽になるってそういうこととはちょっと違うと思うんだけど」

「もう！ごちゃごちゃ言っていないで早く選んでよ！セレクター
なんでしょ！？」

「あんな小夜。セレクターだからっていくらなんでもそれは」
「いいから早く選べ！」

それは、暖かな陽気に包まれた、春の日の出来事だった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7367u/>

セレクター

2011年8月19日03時26分発行